日高市埋蔵文化財調査報告書　第43集

若　　宮

－51次調査－

２０２３

埼玉県日高市教育委員会

第43集

若　宮－51次調査－

日高市教育委員会

あ　い　さ　つ

日高市は埼玉県南西部に位置し、埼玉県を代表する清流高麗川が流れ、緑も多く自然に恵まれた住環境にあります。文化財につきましても、先人が長い年月をかけて築きあげた歴史や文化が数多くあります。しかし一方で、土地区画整理事業に伴う市街化の整備や物流倉庫等の大型開発も進み、先人の生活や文化を伝える埋蔵文化財の保護、保存が急務となっております。当市では開発に伴って緊急発掘調査を行い、記録保存の処置を講じております。

今回刊行する報告書は、令和元年度に調査しました若宮遺跡の成果をまとめたものです。奈良・平安時代の住居址から多くの土器が出土し、その中に陰陽道や修験道に関わると思われる五芒星を墨書した土器が、10点以上含まれていました。どのように使われていたのか、興味をひかれます。

本書が郷土資料、学術資料として広く活用され、郷土愛そして文化財保護の向上に役立てば幸いです。

発掘調査そして報告書の刊行にあたり、ご協力いただきました文化庁、埼玉県教育委員会をはじめ、事業者、土地所有者、多くの市民の皆さま、発掘調査に従事いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

令和５年３月

日高市教育委員会
教育長　中　村　一　夫

例　　言

1　本書は埼玉県日高市大字女影に所在する若宮遺跡（132遺跡）51次調査の調査報告書である。

2　発掘調査は、日高市教育委員会が実施した。

3　調査期間は、令和元年５月７日から６月14日である。

4　発掘調査通知の発番は、平成31年４月26日付日教生発第35号である。

5　発掘調査、資料整理及び調査報告書作成は早川修司、大熊雅弘が担当した。

6　挿図図版の縮尺は、それぞれのキャプションに明記した。挿図中の遺物番号と写真図版番号は一致する。

7　拓本、トレース、遺物実測は松本尚也、早川修司、大熊雅弘、新井敏子、吉田祐子、渡辺敬子が行い、図版作成及び遺物写真撮影は早川修司が行った。

8　本書の編集は早川修司が行い、執筆は第１章、第２章、第３章（遺構）、第５章２は早川修司が、第３章（遺物）、第５章１を大熊雅弘が行った。

9　自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボに委託した。

10　石質の鑑定は、埼玉県立豊岡高等学校教諭田口聡史氏にお願いした。

11　発掘調査及び資料整理に関して次の諸氏、諸機関よりご指導、ご協力を得た。厚く感謝する次第である。（敬称略、順不同）

田中広明　富元久美子　埼玉県教育局文化資源課　(公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

12　調査組織

調査主体者	日高市教育委員会		
	教育長	中村一夫	
	教育部長	吉野靖彦	令和元年度
		国分　央	令和４年度
	生涯学習課長	駒井　実	令和元年度
		中條智則	令和４年度
	生涯学習課文化財担当主幹	松本尚也	
	生涯学習課文化財担当主査	早川修司	
	生涯学習課文化財担当	大熊雅弘	
	生涯学習課埋蔵文化財専門調査員	中平　薫	令和元年度
調査担当者	生涯学習課文化財担当主幹	松本尚也	
	生涯学習課文化財担当主査	早川修司	
	生涯学習課文化財担当	大熊雅弘	

13　発掘調査及び資料整理作業員

調査作業員　岡野芳美　小倉響子　倉本信代　田中ひさ子　土屋八重子　土肥敏子　森稔子　吉田祐子　渡辺敬子

資料整理　新井敏子　岡野芳美　長部孝子　倉本信代　田中ひさ子　土屋八重子　土肥敏子　森稔子　吉田祐子　渡辺敬子

目　　次

あいさつ

例　　言

第１章　遺跡の立地と環境…… 1

第２章　調査の経過…… 3
　１：発掘調査に至る経緯…… 3
　２：発掘調査と資料整理の経過…… 4

第３章　遺構と遺物…… 5
　１：遺構外出土遺物…… 5
　２：27号住居址…… 5
　３：28号住居址…… 25

第４章　自然科学分析…… 30

第５章　まとめ…… 37
　１：出土遺物及び遺構の時期について…… 37
　２：墨書土器について…… 38

挿　図　目　次

1　遺跡位置図…… 2
2　若宮遺跡周辺地形図…… 3
3　若宮遺跡51次調査区全測図…… 4
4　遺構外出土遺物…… 5
5　27号住居址…… 6
6　27号住居址遺物出土状況図（１）…… 7
7　27号住居址遺物出土状況図（２）…… 8
8　27号住居址カマド…… 9
9　27号住居址出土遺物（１）…… 11
10　27号住居址出土遺物（２）…… 12
11　27号住居址出土遺物（３）…… 13
12　27号住居址出土遺物（４）…… 14
13　27号住居址出土遺物（５）…… 16
14　27号住居址出土遺物（６）…… 17
15　27号住居址出土遺物（７）…… 18
16　27号住居址出土遺物（８）…… 19
17　27号住居址出土遺物（９）…… 20
18　27号住居址出土遺物（10）…… 22
19　27号住居址出土遺物（11）…… 23
20　28号住居址…… 25
21　28号住居址カマド…… 26
22　28号住居址出土遺物（１）…… 27
23　28号住居址出土遺物（２）…… 28

図　版　目　次

図版１　51次調査区全景（北東から）
　　51次調査区全景（西から）
図版２　27号住居址遺物出土状況（１）
　　27号住居址遺物出土状況（２）
　　27号住居址遺物出土状況（３）
図版３　27号住居址遺物出土状況（４）　27号住居址遺物出土状況（５）
　　27号住居址遺物出土状況（６）　27号住居址遺物出土状況（７）
　　27号住居址遺物出土状況（８）　27号住居址遺物出土状況（９）
　　27号住居址遺物出土状況（10）　27号住居址遺物出土状況（11）
図版４　27号住居址（１）
　　27号住居址（２）
　　27号住居址カマド
図版５　28号住居址（１）　28号住居址西カマド
　　28号住居址（２）　28号住居址北カマド
　　28号住居址貼床下　28号住居址貼床下土錘出土状況
　　作業風景（１）　作業風景（２）
図版６　27号住居址出土遺物（１）
図版７　27号住居址出土遺物（２）
図版８　27号住居址出土遺物（３）
図版９　27号住居址出土遺物（４）
図版10　27号住居址出土遺物（５）
図版11　27号住居址出土遺物（６）
図版12　27号住居址出土遺物（７）
図版13　27号住居址出土遺物（８）
図版14　27号住居址出土遺物（９）
　　28号住居址出土遺物（１）
図版15　28号住居址出土遺物（２）
図版16　墨書

第１章　遺跡の立地と環境

日高市は埼玉県南西部の山地と丘陵地の境界に位置し、首都圏50㎞にあたる。市の西部には外秩父山地の東縁が広がり、山地の縁辺部に八王子構造線が南北に走っている。外秩父山地から北に毛呂山丘陵、南に高麗丘陵が舌状に東へ張り出し、市の南北はこの２つの丘陵により画されている。奥武蔵正丸峠付近の山々を源とする高麗川は市の西部から北辺を小さな蛇行を繰り返しながら東流し、扇状の沖積地を形成している。高麗川から東方の右岸を坂戸台地と呼び、市の平坦部はこの坂戸台地に位置している。坂戸台地は市西部の高麗本郷付近を扇頂とする古い扇状地形で、高麗丘陵を源とする小畔川をはじめとした多くの小河川により小支谷が形成されている。

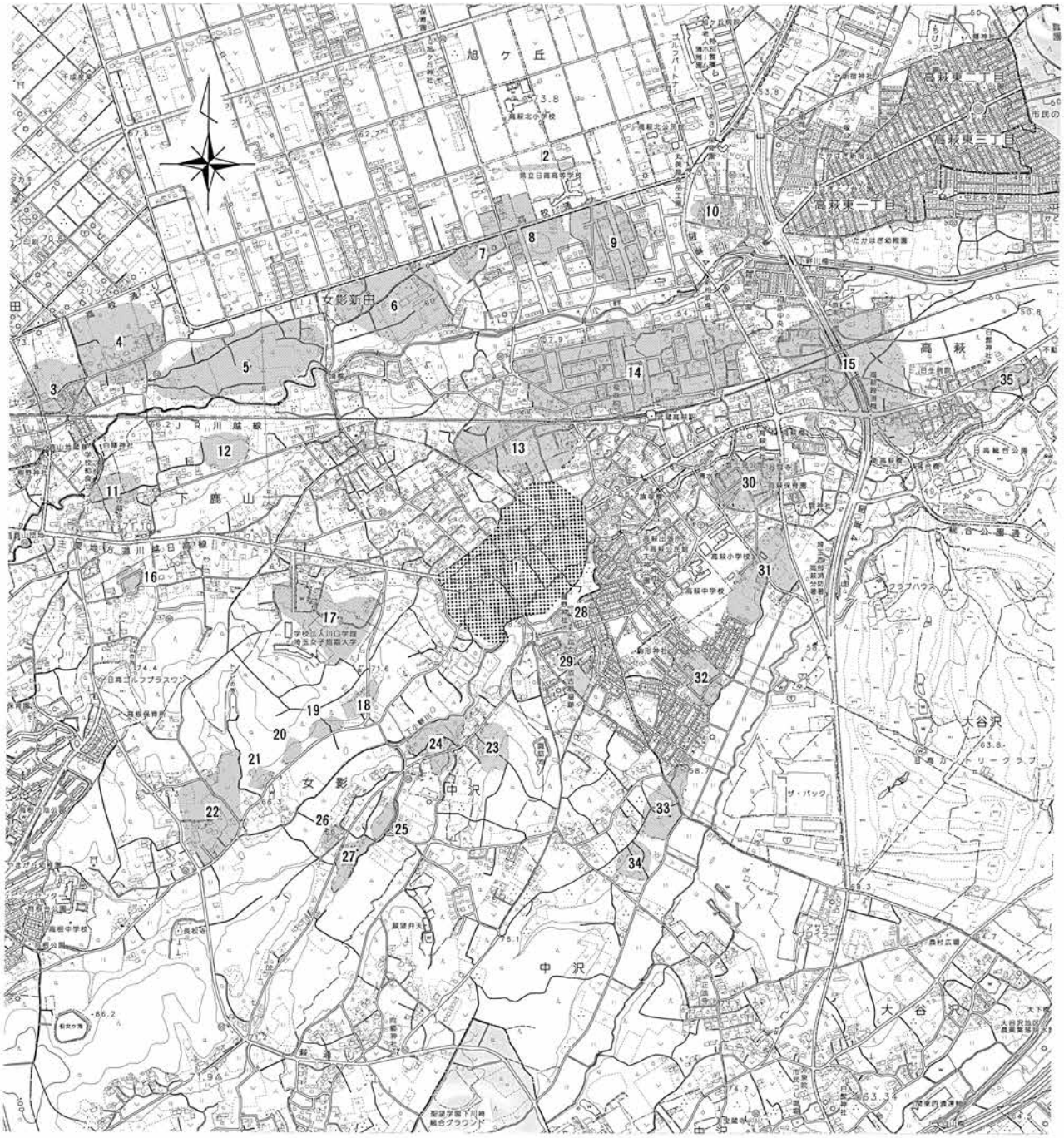
市西部の高麗地区は、高麗川が大きく蛇行している巾着田をはじめ、山地は奥武蔵自然公園に指定されており自然が多く残っている地域である。市中央部の高麗川地区は高麗川駅西口土地区画整理事業により都市化が進み、市東部の高萩地区でも、武蔵高萩駅北土地区画整理事業、寺脇地区土地区画整理事業や首都圏中央連絡自動車道の開通により景観が大きく様変わりした。

当市の遺跡立地を考えると、高麗川や幾筋もの小畔川、そして南小畔川の流れに沿って遺跡が連なっている。各小畔川流域の遺跡の密度は濃く、縄文時代の遺跡も数多く所在する。遺跡は概ね河川近くの台地に立地し、水の確保が容易な場所に築いている。市内には沖積地の発達した地域が少ないためか弥生時代の遺跡は確認されていない。古墳時代の遺跡も僅かに２ヶ所確認されているだけで、まったくの空白期といえる。このことは当市の歴史の大きな特徴である。奈良時代になると、霊亀二年（716年）に日高市、飯能市を中心とした地域に高麗郡が建郡され、それ以降集落は爆発的に増え平安時代に興隆期を迎える。

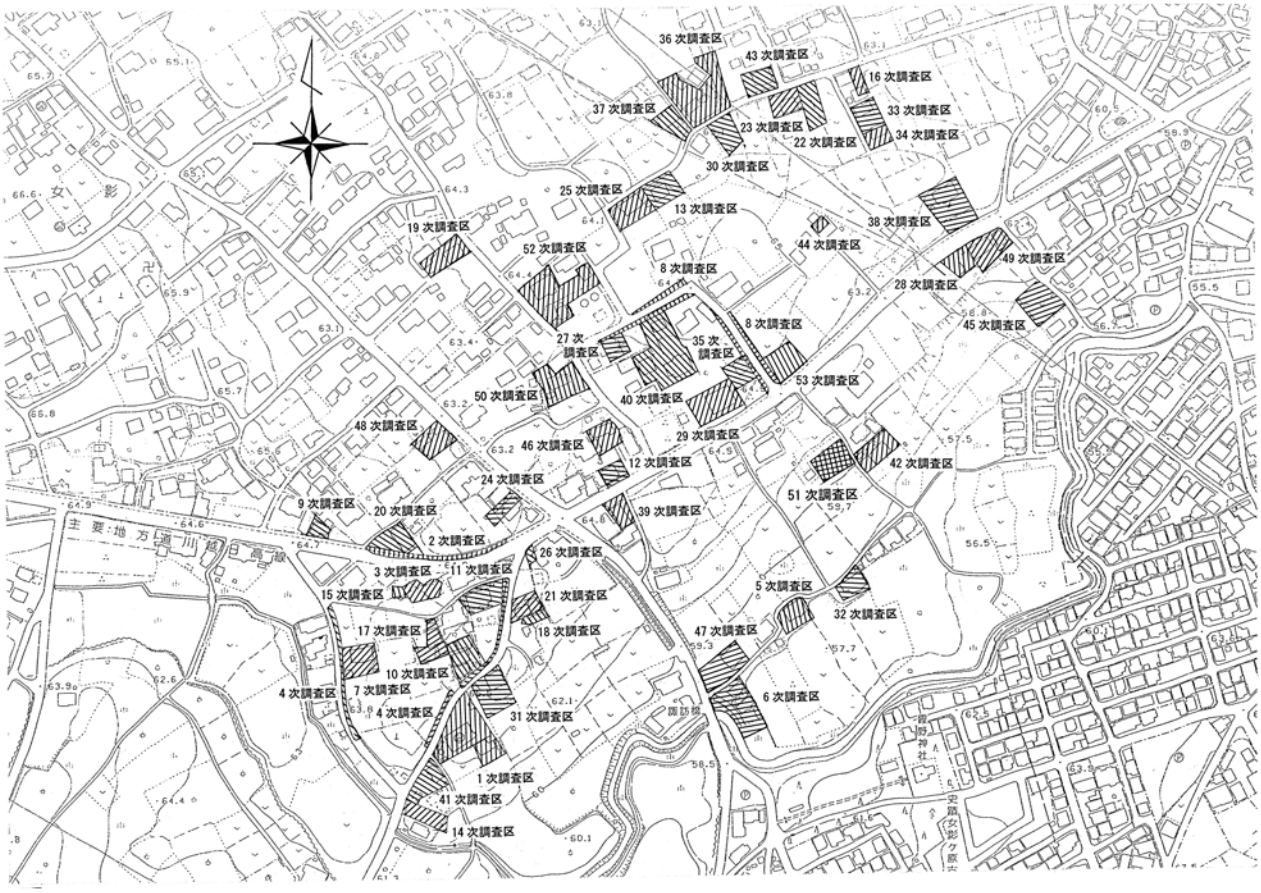
若宮遺跡（１）、古道遺跡（13）は小畔川と下小畔川に挟まれた台地上に位置している。高麗丘陵を源とする小畔川左岸には、稲荷遺跡（３）（４）、大黒ヶ谷戸遺跡（５）、道光林遺跡（６）、中王神遺跡（７）、王神遺跡（８）、拾石遺跡（９）、新宿遺跡（10）が所在している。稲荷遺跡では８世紀後半から９世紀中葉の住居址が３軒調査されている。道光林遺跡では８世紀前半の住居址３軒が調査され、内１軒の住居址は南壁に張り出しを持つ。中王神遺跡でも盛土保存対応で詳細な時期は不明であるが、奈良・平安時代の住居址を２軒検出している。王神遺跡では８世紀中葉から９世紀前半の住居址74軒、掘立柱建物跡52棟、井戸址13基、道路遺構１条、水路遺構１条、東西５間×南北４間で中柱を持つ建物跡１棟の調査を行った。住居址覆土からは鳥形硯の蓋の一部が出土した。関東地方での出土例はなく、近隣では長野県塩尻市菖蒲沢窯跡から出土している。鳥形硯の多くは平城京からの出土である。拾石遺跡は８世紀中葉から９世紀後半の住居址51軒、井戸址19基、道路遺構１条、水路遺構２条、掘立柱建物跡25棟を調査し、耳皿、石製巡方、石製丸鞆、漆紙などの特殊な遺物や、「厨」、「家長」、「南家」、「貞」、「坏」、「田」、「万」などの墨書土器も出土している。道路遺構、水路遺構は王神遺跡と同一の遺構である。新宿遺跡では８世紀中葉から９世紀後半の住居址11軒を検出している。出土した「山本」と書かれた墨書土器は、貞観十四年（872年）の『貞観寺田地目録帳』（仁和寺文書）に出てくる武蔵国高麗郡山本荘との関連資料として注目される。

小畔川右岸には堀ノ内遺跡（14）が所在している。若宮遺跡は下小畔川左岸に位置している。若宮遺跡は遺跡の中を伝承鎌倉街道が南北に貫き、８世紀前半に建立されたとされる女影廃寺を含んでいる。

この他に下小畔川左岸には小河原遺跡（17）、上敷遺跡（18）（19）、姥ヶ原遺跡（20）（21）、姥田遺跡（22）が、右岸には金子ヶ谷戸遺跡（23）、上ノ条遺跡（25）（26）（27）が所在する。


旭ケ丘
高萩東一丁目
高萩東三丁目
高萩
女影新田
下鹿山
女影
中沢
大谷沢
高萩小学校
高萩中学校
高萩北小学校
高萩北公民館
高萩公民館
高萩駅
高萩中学校
JR川越線
高萩合同庁舎
高萩合公園
ゴルフパーク
ゴルフクラブハウス
ザ・パック
日高ゴルフプラスワン
学校法人川口学園
埼玉女子短期大学
高萩中学校
高萩公園
高萩神社
高萩保育園
高萩幼稚園
高萩東幼稚園
高萩東小学校
高萩東公民館
高萩東分館
高萩東保育園
高萩東神社
高萩東郵便局
高萩東中央公園
たかはぎ幼稚園
高萩公民館
高萩合公園通
高萩通
高萩川
高萩駅

第２章　調査の経過

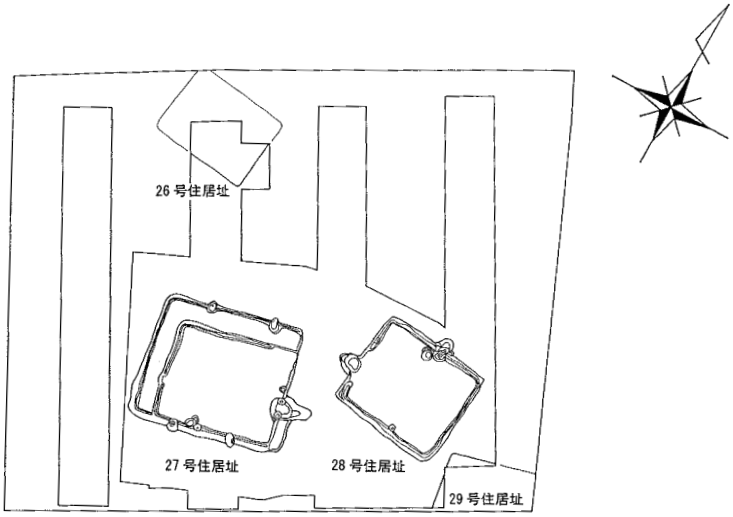


第２図　若宮遺跡周辺地形図（1/5,000）

１：発掘調査に至る経緯

今回の調査対象地は、平成30年５月に専用住宅の建築計画について照会があり、日高市教育委員会は若宮遺跡に該当するため試掘調査が必要である旨を回答した。平成31年１月10日付けで開発行為許可申請書が日高市に、文化財保護法に基づく埋蔵文化財発掘の届出が日高市教育委員会に提出された。試掘調査を平成31年２月20日から22日にかけて実施し、奈良・平安時代の住居址４軒を検出した。

検出した遺構の取り扱いについて、住宅建設会社と協議を行った。提示された計画図面は、すべての遺構において盛土保存対応が可能なものであった。その結果、遺構は盛土保存し、基礎工事等掘削時に立ち会いを行うことになった。しかし、基礎工事の立ち会いで、日高市教育委員会へ提出されていた計画図面と異なった施工を実施していた。住宅建設会社と再協議を行ったところ、市教育委員会への届出後、設計を変更していたことが判明した。住宅建設会社から改めて提示された変更後の計画では盛土保存の条件を満たさないため、建築予定建物の直下で検出した住居址２軒について、記録保存で対応することになった。



第３図　若宮遺跡51次調査区全測図（1/200）

２：発掘調査と資料整理の経過

若宮遺跡は、市の中央部を蛇行しながら東流する小畔川と下小畔川に挟まれた東西に長く延びる舌状を呈す台地上の標高62～65m付近に位置する。遺跡の南には、下小畔川によって開析された幅の狭い谷津田が形成されている。

昭和55年以降、54回の調査で奈良・平安時代の住居址29軒（内４軒は盛土保存）、掘立柱建物跡３棟、井戸址３基（内１基は盛土保存）、溝２条、大形土壙３基等多数の遺構を検出している。

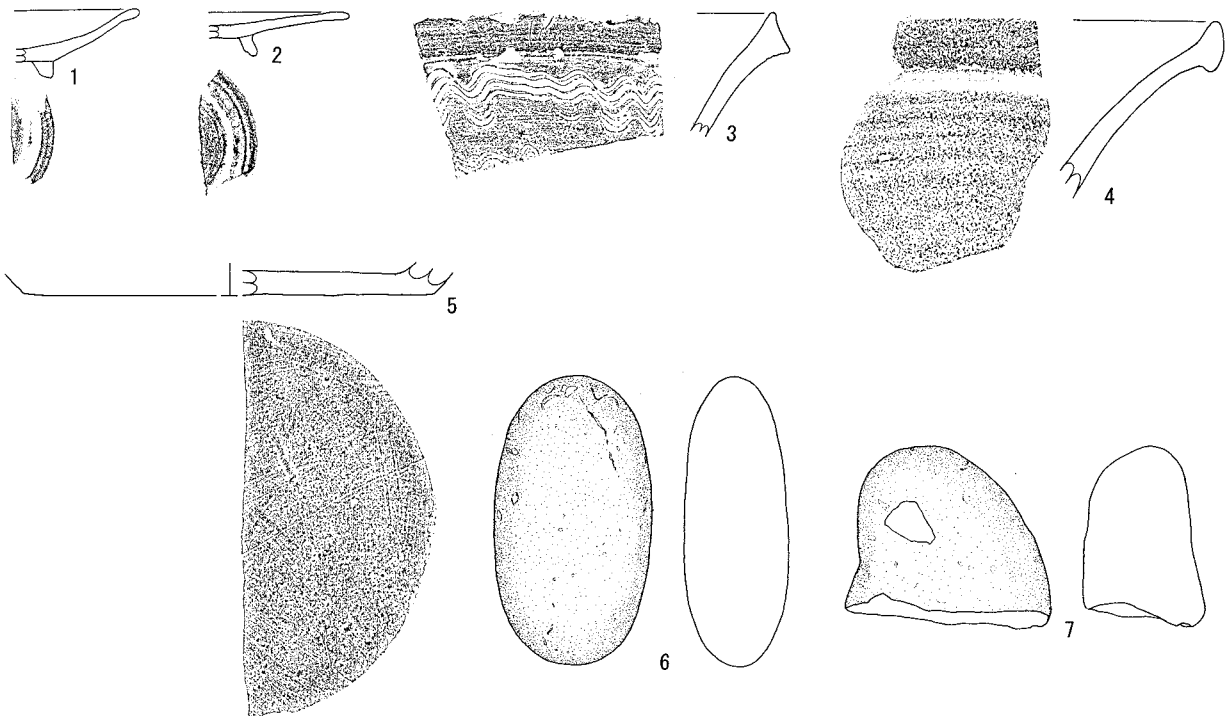
本遺跡の特徴は、８世紀前半の高麗郡建郡に伴い、郡寺として創建されたと推定される女影廃寺が含まれることである。第３次調査では、大形の土壙１基と断面がＶ字形を呈する溝１条が検出され、土壙からは多くの軒丸瓦、軒平瓦をはじめとする各種の瓦、「高」の陽刻の押印がある平瓦の他、瓦塔や塼といった特殊な遺物が出土している。また、溝からは「寺」と墨書された須恵器も出土している。第18次調査においても土壙から「寺」と墨書された須恵器が出土している。これらの遺物は、寺院の存在を窺わせる資料と考えられるが、現状では寺域や伽藍配置は不明である。

本遺跡の東端で実施した第45次調査は、台地平坦面から下小畔川に向かう斜面に位置し、５軒の住居址が重複する状況で検出された。今回の調査も同様の立地であり、遺跡の斜面にも遺構の広がりが認められることが分かってきた。

調査を実施した地点は畑で、所在地は埼玉県日高市大字女影字八郎関399-2で、調査面積は366.12㎡である。試掘調査は、幅２ｍのトレンチを４本設定し、遺構確認面である黄褐色ローム層、黒色土上面まで40～65㎝掘り下げた。その結果、奈良・平安時代の住居址４軒を検出した。

発掘調査終了後、室内の整理作業である遺物の洗浄、注記、接合作業、遺構図の校正作業等を行った。報告書刊行に向けて遺物の実測、拓本、トレース及び遺構図面の修正、トレース、遺物写真撮影などを実施し、原稿執筆を行った。

第３章　遺構と遺物



第４図　遺構外出土遺物（1/3）

１：遺構外出土遺物

高台付皿形土器（第４図１、２）

１、２は器内外面にロクロ水挽き整形を施し、底部に高台を貼り付けている。１の体部は内彎しながら広がり、口縁部が外反する。２の体部は直線的に広がる。焼成は１、２とも還元焔焼成である。１は器高2.7cm、高台高0.7cm、２は器高1.7cm、高台高0.8cmをはかる。

甕形土器（第４図３～５）

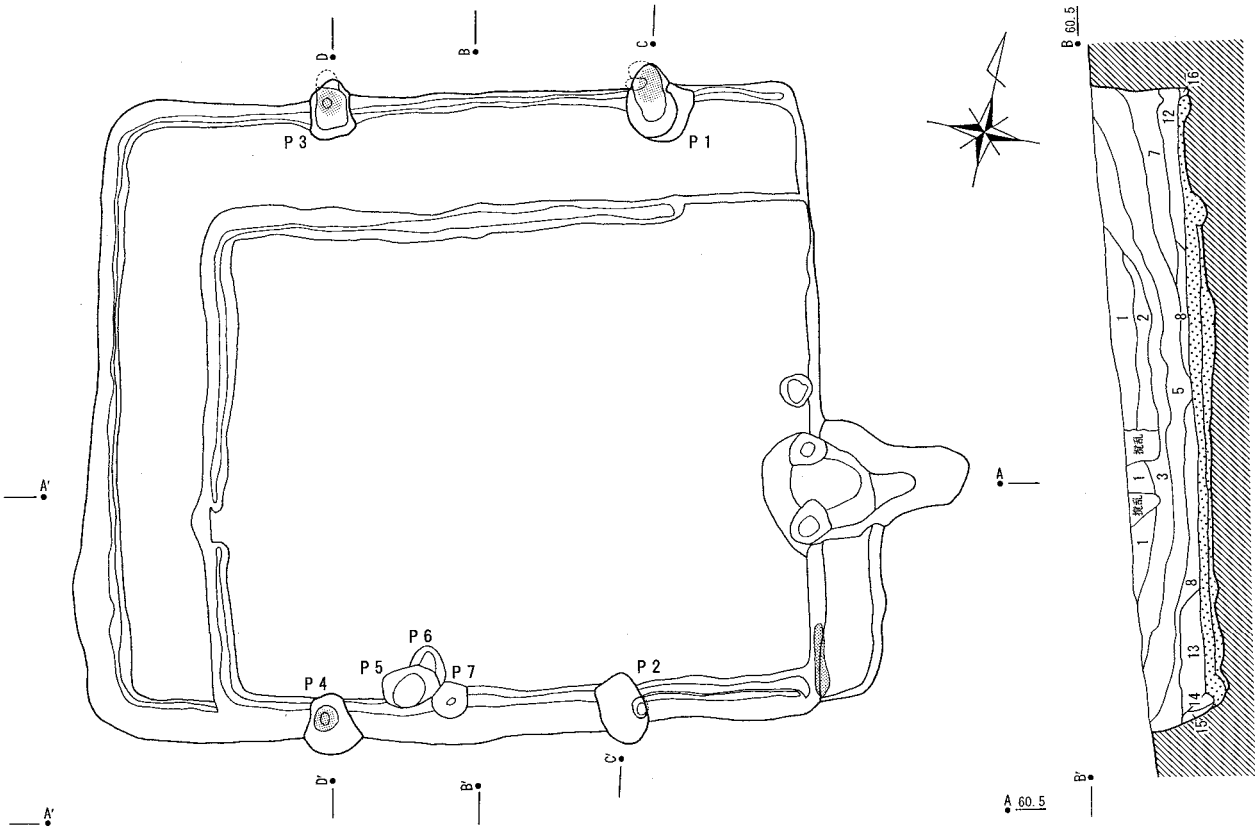
３、４は口縁部である。器内外面にロクロ水挽き整形を施す。３は頸部に２段の波状文を施し、上段には６条１組の波状文を施す。５は底部破片で、底部器外面は箆削りを施し、胴部下端にも箆削りを施す。推定底径15.5cmをはかる。

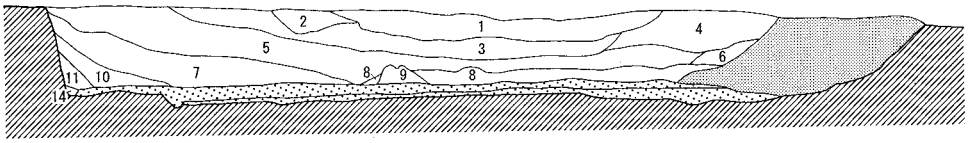
磨石（第４図６、７）

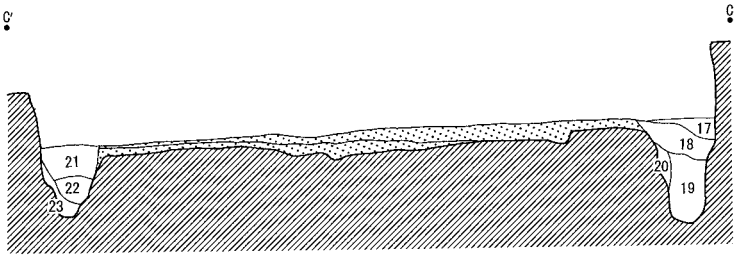
６、７は磨石である。６は扁平な楕円形を呈し、７は下半部を欠損する。６、７ともに表裏、側面に磨痕がみられる。６は砂岩、７は軽石である。６は長さ11.5cm、幅6.2cm、重さ431ｇをはかる。

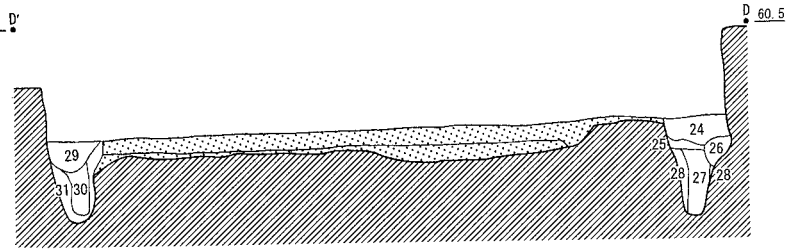
２：27号住居址

本住居址は、調査区の中央西寄りで検出した。平面プランは長方形を呈し、東西5.85m、南北5.1mをはかる。主軸方位はＮ－84°－Ｅを示す。壁高は43～79cmをはかり、ほぼ垂直に立ち上がる。カマドは東壁中央のやや南寄りに構築される。床面は、カマド正面、住居中央からＰ５及び北東コーナーにかけて硬化が認められる。周溝は東壁を除く壁沿いに巡り、幅６～17cm、深さ２～16cmをはかる。カマド右側に幅









27号住居址

1層　暗褐色土　焼土粒子を少量含み、ローム粒子、炭化物粒子を微量含む。

2層　暗褐色土　焼土粒子、焼土ブロックを含み、炭化物粒子を少量含む。

3層　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を微量含む。

4層　暗褐色土　焼土粒子を少量含み、ローム粒子、粘土粒子、炭化物粒子を微量含む。

5層　黒褐色土　ロームを少量含み、焼土粒子、炭化物粒子を微量、ローム粒子を極微量含む。

6層　黒褐色土　焼土粒子、粘土粒子を極微量含む。

7層　黒褐色土　ローム、炭化物粒子を微量含み、ローム粒子極微量含む。

8層　黒褐色土　粘土粒子を少量含み、ローム、焼土粒子、粘土ブロックを微量含む。

9層　暗褐色土　焼土粒子、粘土粒子を少量含み、粘土ブロックを微量含む。

10層　黒褐色土　炭化物粒子を微量含み、ローム粒子を極微量含む。

11層　黒褐色土　ロームを含み、ローム粒子を極微量含む。

12層　黒褐色土　粘土粒子を少量含み、ローム粒子、焼土粒子を微量含む。

13層　黒褐色土　粘土粒子、粘土ブロックを少量含み、焼土粒子を微量含む。

14層　黒褐色土　ローム粒子を極微量含む。

15層　黒褐色土　ローム、焼土粒子を微量含む。

16層　暗黄褐色土　ロームを含む。

17層　暗褐色土　ローム粒子を少量含み、ロームブロックを微量含む。

18層　暗褐色土　ローム粒子を含み、ローム、ロームブロックを少量含む。

19層　黒褐色土　ローム粒子を微量含む。締まり弱い。

20層　暗褐色土　ロームブロックを少量含む。締まり強い。

21層　黒褐色土　ローム粒子、焼土粒子を微量含む。

22層　黒褐色土　ローム、ロームブロックを少量含む。

23層　黒褐色土　ローム・ロームブロックを含む。

24層　黒褐色土　ローム粒子、ローム小ブロックを微量含む。

25層　黒褐色土　ローム粒子を含み、ローム、ロームブロックを少量含む。

26層　黒褐色土　ロームブロックを含む。

27層　黒褐色土　ローム粒子を微量含む。締まり弱い。

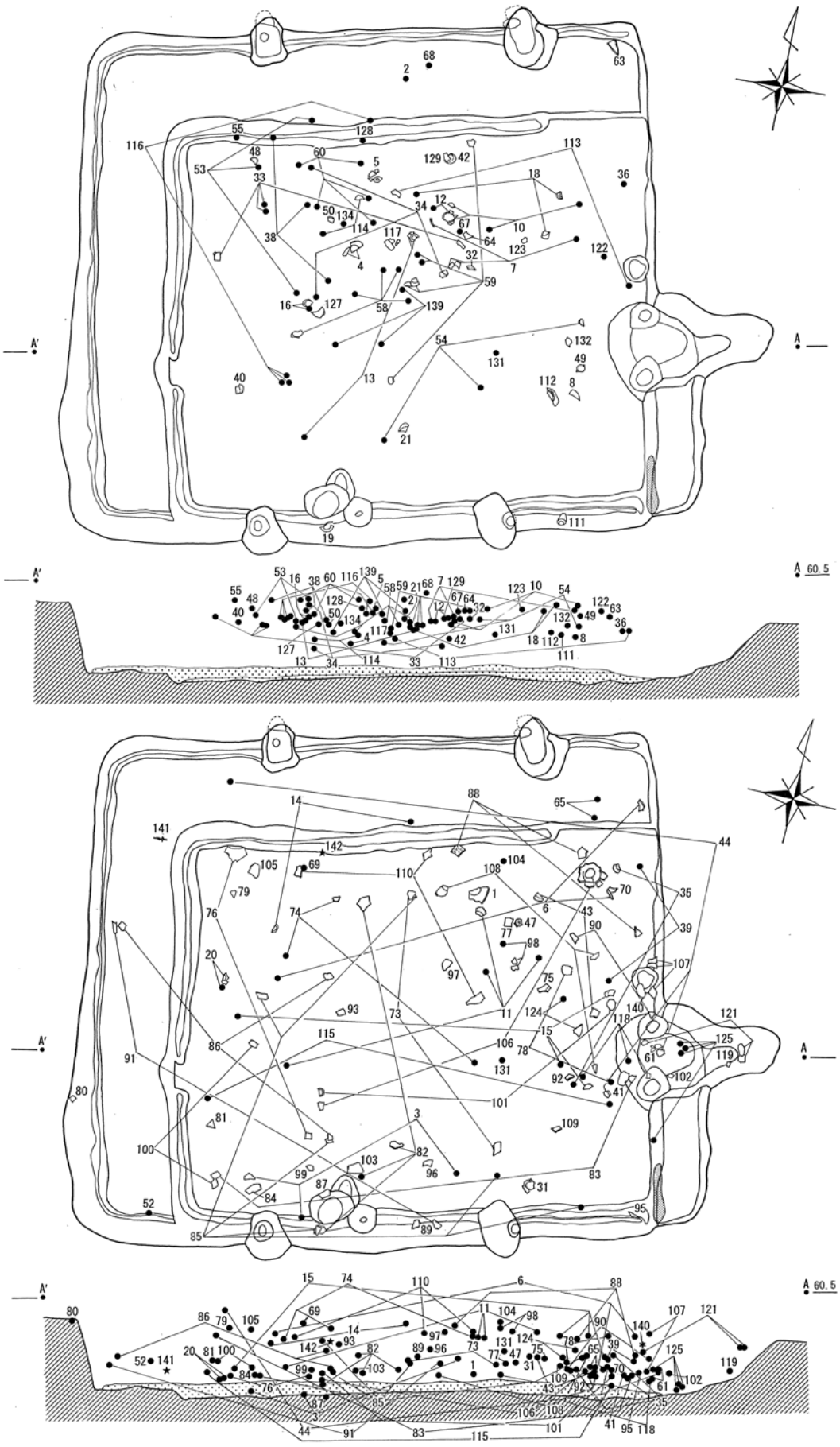
28層　明褐色土　ローム、ロームブロックを含む。締まり強い。

29層　黒褐色土　ローム、焼土粒子を微量含む。

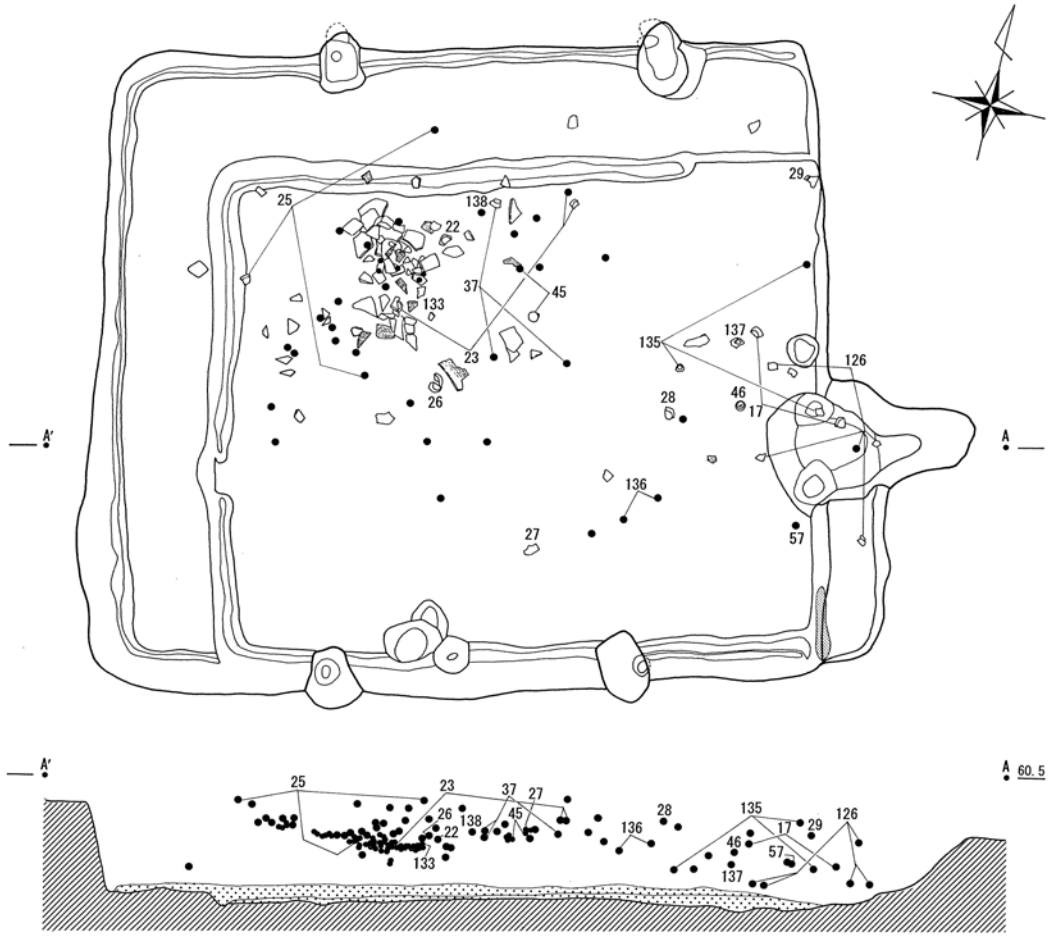
30層　黒褐色土　ローム粒子を極微量含む。締まりやや弱い。

31層　暗褐色土　ローム小ブロック、焼土粒子を微量含む。

第5図　27号住居址（1/60）



第６図　27号住居址遺物出土状況図（１）(1/60)



第７図　27号住居址遺物出土状況図（２）（1/60）　番号のない遺物は、第13図62

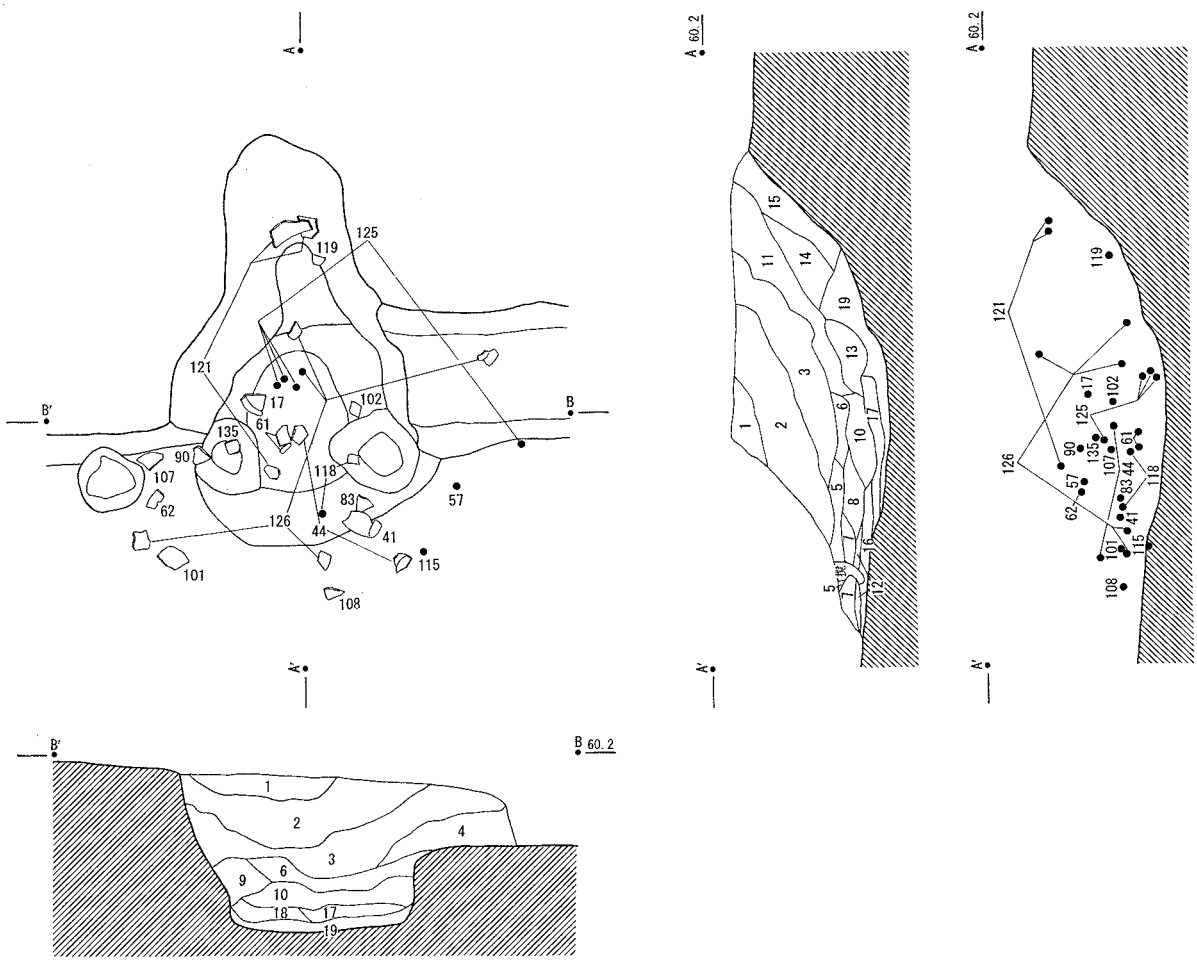
133cm、奥行50cm、深さ11～20cm、床面からの高さ23～26cmの棚状の掘り込みを設けている。

柱穴は５本検出した。Ｐ１～４は主柱穴で壁を抉り込む形で掘られている。径は48～58cm、床面からの深さ41～83cmをはかる。Ｐ５は径42cm、深さ20cmで、入口に関連するものと思われる。

貼床下からは、拡張前の住居が検出された。プランは長方形を呈し、東西4.9m、南北4.3mの規模をもつ。壁高は東壁で67cm、南壁で52cmをはかる。東壁、南壁はほぼ位置を変えずに北、西側へ大きく拡張し、床面も10cm程度高さを上げている。カマドは、拡張後の住居と同じ場所に存在していたと考えられる。床面は良好に締まり、カマド正面、住居中央から南壁寄り、Ｐ６付近まで硬化が認められる。周溝は東壁と北東コーナー付近を除いて巡る。幅９～26cm、深さ２～７cmをはかる。柱穴は２本検出した。Ｐ６は径30cm、深さ８cm、Ｐ７は径30cm、深さ27cmをはかる。

貼床下は、拡張前の住居は北東側を除く３箇所のコーナーが17～26cm落ち込む。拡張後の住居は、平坦に３～10cm掘り下がる。

本住居址からは、多量の遺物が出土している。住居中央の上層から中層とカマド付近の中層から下層にかけて多く分布する。住居中央の北寄りでは、須恵器大甕（第13図62）の破片が集中しており、周辺の覆土には焼土粒子が多く含まれている状況も認められた。その他、「☆」の墨書土器が11点出土していることが特筆される。



27号住居址カマド

1層　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子を微量含む。
2層　暗褐色土　粘土粒子を少量含み、ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を微量含む。
3層　黄茶褐色土　粘土粒子、粘土ブロックを多量に含み、焼土粒子を微量含む。
4層　茶褐色土　粘土粒子、粘土ブロックを少量含み、ローム粒子、焼土粒子を微量含む。
5層　暗褐色土　焼土粒子を微量含む。
6層　茶褐色土　焼土粒子、粘土粒子、粘土ブロックを少量含む。
7層　茶褐色土　焼土粒子、粘土粒子を含む。
8層　褐色土　焼土粒子を含み、粘土粒子を少量、炭化物粒子を微量含む。
9層　褐色土　粘土粒子、粘土ブロックを多量に含む。
10層　赤茶褐色土　焼土粒子、焼土ブロックを含み、粘土粒子、粘土ブロックを少量含む。
11層　赤褐色土　焼土粒子、焼土ブロックを主体とする。
12層　暗褐色土　焼土粒子、粘土粒子を少量含む。
13層　赤茶褐色土　焼土粒子、焼土ブロックを多量に含み、粘土粒子、粘土ブロックを少量、炭化物粒子を微量含む。
14層　赤茶褐色土　焼土粒子、焼土ブロックを多量に含み、粘土ブロックを含む。
15層　茶褐色土　ロームを含み、焼土粒子、焼土ブロックを微量含む。
16層　褐色土　焼土粒子を含み、粘土粒子を少量、炭化物粒子を微量含む。
17層　茶褐色土　焼土粒子、炭化物粒子を少量含み、粘土粒子を微量含む。
18層　暗茶褐色土　焼土粒子、炭化物粒子を微量含む。
19層　暗褐色土　焼土粒子、粘土粒子、炭化物粒子を少量含む。

第８図　27号住居址カマド（1/30）

カマド

カマドは東壁の中央やや南寄りに構築される。規模は幅93cm、奥行162cmをはかり、平面プランは細長いＵ字状を呈する。壁外へ113cm掘り込まれる。火床部は幅40cm、奥行56cmの楕円形を呈し、床面から８cm掘り下がる。火床部の両側に径30～35cm、深さ７～９cmの浅い掘り込みがある。火床部から煙道部は緩やかに立ち上がる。カマド左側の住居壁際に、径27cm、深さ12cmをはかる円形の掘り込みがある。

出土遺物

蓋形土器（第９図１～９・図版６－１～８）

１～９は器内外面にロクロ水挽き整形を施し、天井部器外面に回転篦削りを施す。１、４の天井部は緩

やかに彎曲しながら開き、口縁部の近くで外反する。２、３、５～８の天井部は緩やかに彎曲しながら開く。１、３、４、６、８の口縁部は垂直に屈曲し、５の口縁部はくの字状に強く外反する。７の口縁部は僅かに内屈する。１は直径5.8cmの環状つまみ、２、３は中央部がくぼむボタン状つまみ、４、５は擬宝珠状つまみを有する。１は天井部器内面が磨かれており、転用硯と考えられる。６の内面には波線が箆書きされている。９の天井部器外面には墨書が認められるが判読はできない。１、３～９は還元焔焼成、２は半還元焔焼成である。３、９は胎土に白色針状物質を含む。３は覆土中と貼床下の破片が接合している。

１は推定口径24cm、器高3.7cm、３は推定口径18.5cm、器高3.6cm、４は口径18.5cm、器高４cm、５は推定口径18cm、器高4.3cm、６は推定口径18.4cm、７は推定口径25.2cm、８は推定口径16.4cmをはかる。

坏形土器（第９図10～17、第10図18～27、第11図28～43、第12図44～52・図版６－10～13、図版７－15～19、21～27、図版８－28、29、31、33～38、41～43、図版９－44～47）

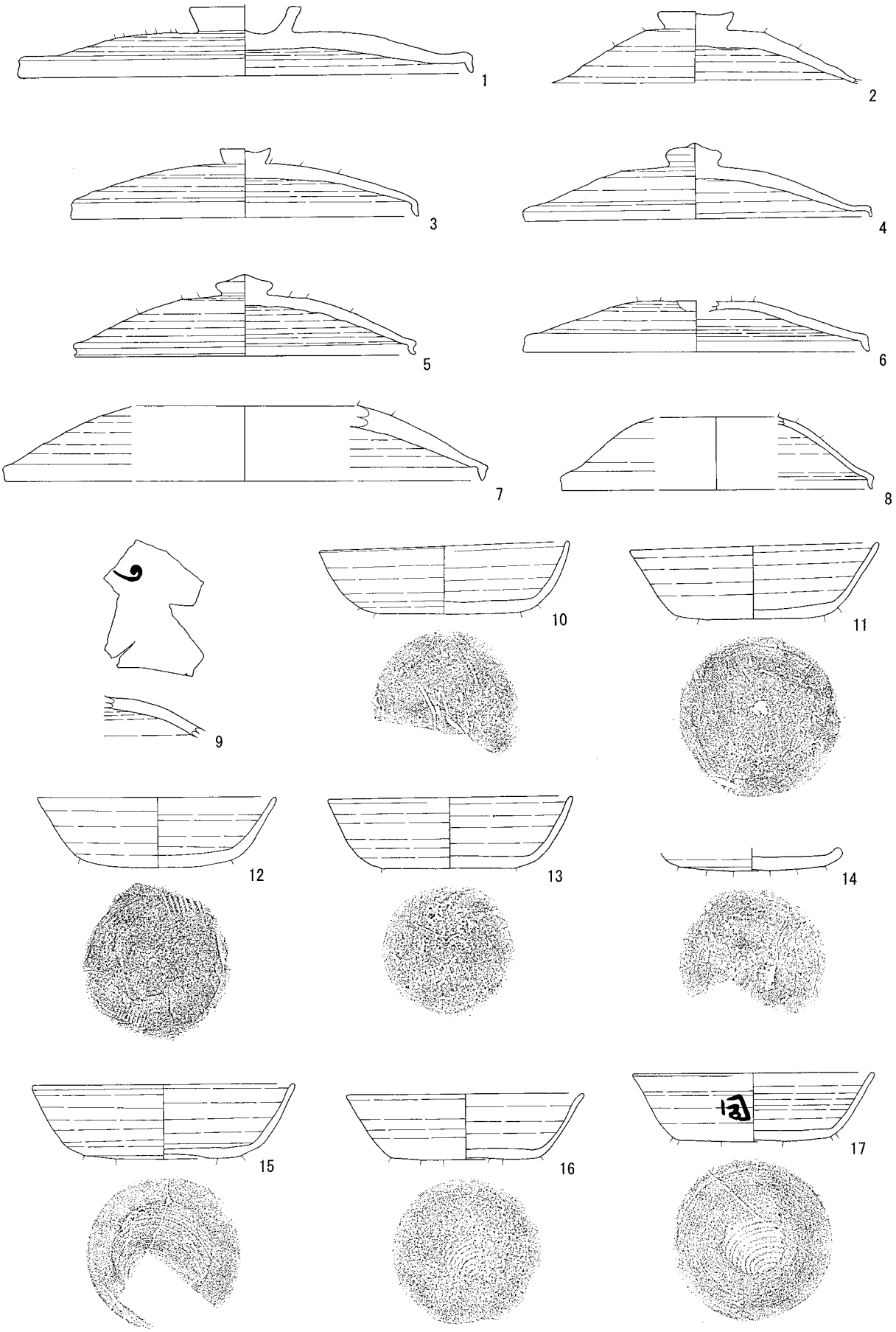
10～50は須恵器で、器内外面にロクロ水挽き整形を施す。10～14の底部には全面手持ち箆削りを施す。15～20、24、26、27、29～33、38～40、42～50の底部には回転糸切り後、外周部回転箆削りを施す。21、37の底部には回転糸切り後、外周部に狭い回転箆削りを施す。22、23、25、28、34、35、41の底部には全面回転箆削りを施す。36の底部には回転糸切り後、外周部に手持箆削りを施す。16、22～24は体部器外面下端に回転箆削りを施す。10、13、22～27、35、38、39、41、45、46は体部から口縁部まで僅かに内彎しながら立ち上がる。11、12、17～19、21、29、32、36、43の体部は直線的に立ち上がる。15、16、20、31、33、34、42、44の体部は僅かに内彎しながら立ち上がり、口縁部が僅かに外反する。37の体部は僅かに内彎しながら立ち上がり、口縁部は直線的に開く。40の体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。15、17、32、33、36、37、41～47、49は器内面の体部と底部との接点に爪先技法が認められ、13～15、29、32、36、40～47、49、50は器外面の体部下端に差し込み痕が残る。

17の体部器外面には「同」、37の底部器外面にも同様に「同」、22～27、29、30の底部器外面、45の体部器外面には「☆」、28の底部器外面には「☆」が朱書されている。

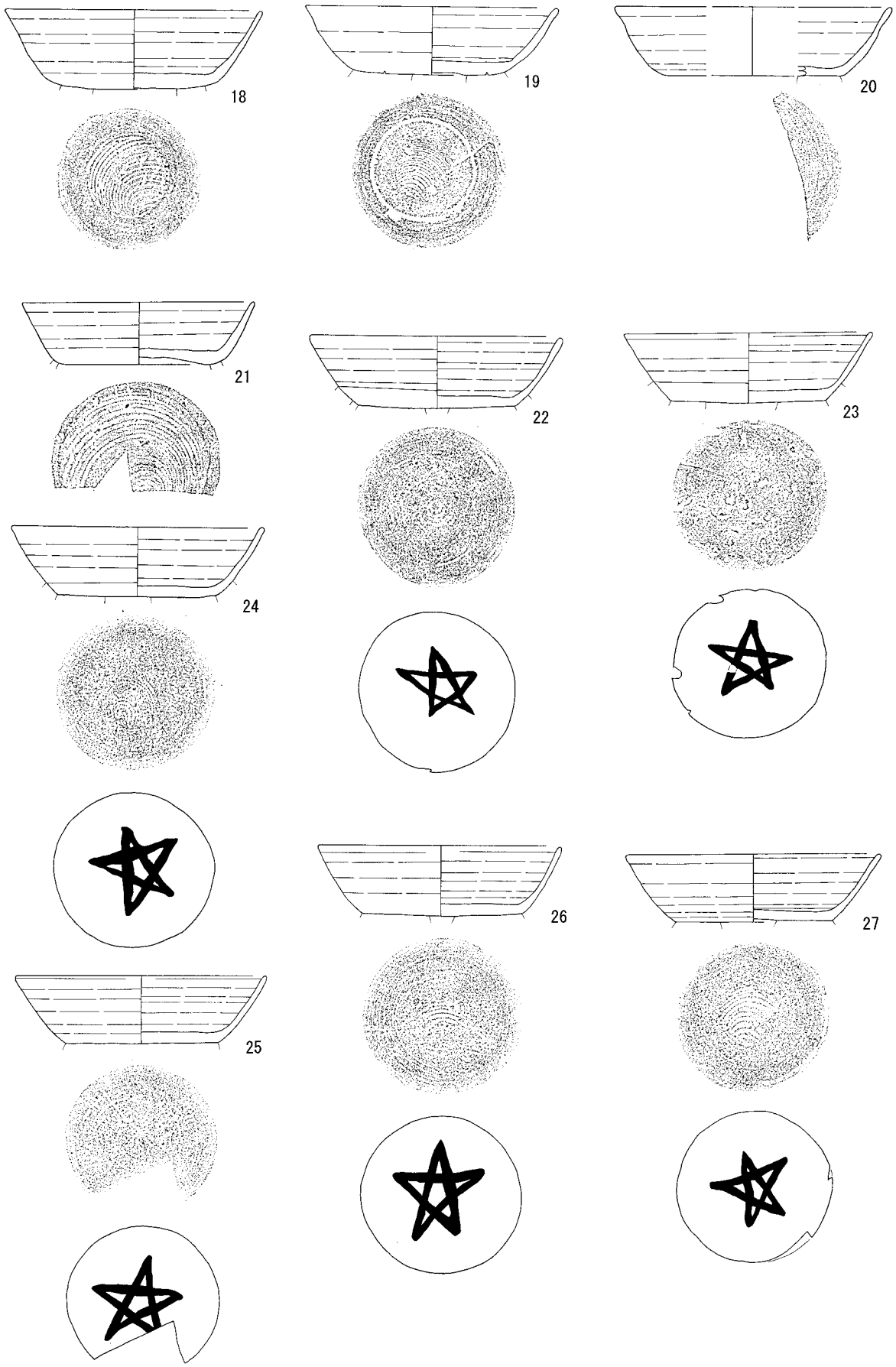
10、20、31～34、48は半還元焔焼成、11～19、21～30、35～38、40～47、49、50は還元焔焼成、39は酸化焔焼成である。33、41～47は還元焔焼成ではあるが、焼成不良のためか器面の一部、あるいは全体が黒色を呈する。断面を確認すると器表面だけでなく、胎土の中まで黒いことが確認できる。黒く変色した部分以外は主に灰白色を呈する。

15、16、19、20、22～28、30、31、34、38、48は胎土に白色針状物質を含む。15、17、33、41～47は砂粒をあまり含まない良質な胎土、爪先技法や指の差し込み、なめらかな底部の箆削りなど、東金子窯跡群の前内出窯産須恵器の特徴を持つ。22～28は法量、色調、調整がよく似ており、同時に焼成された製品と考えられる。同様に33、41～47も法量や色調、調整がよく似ており、同時に焼成された製品と考えられる。

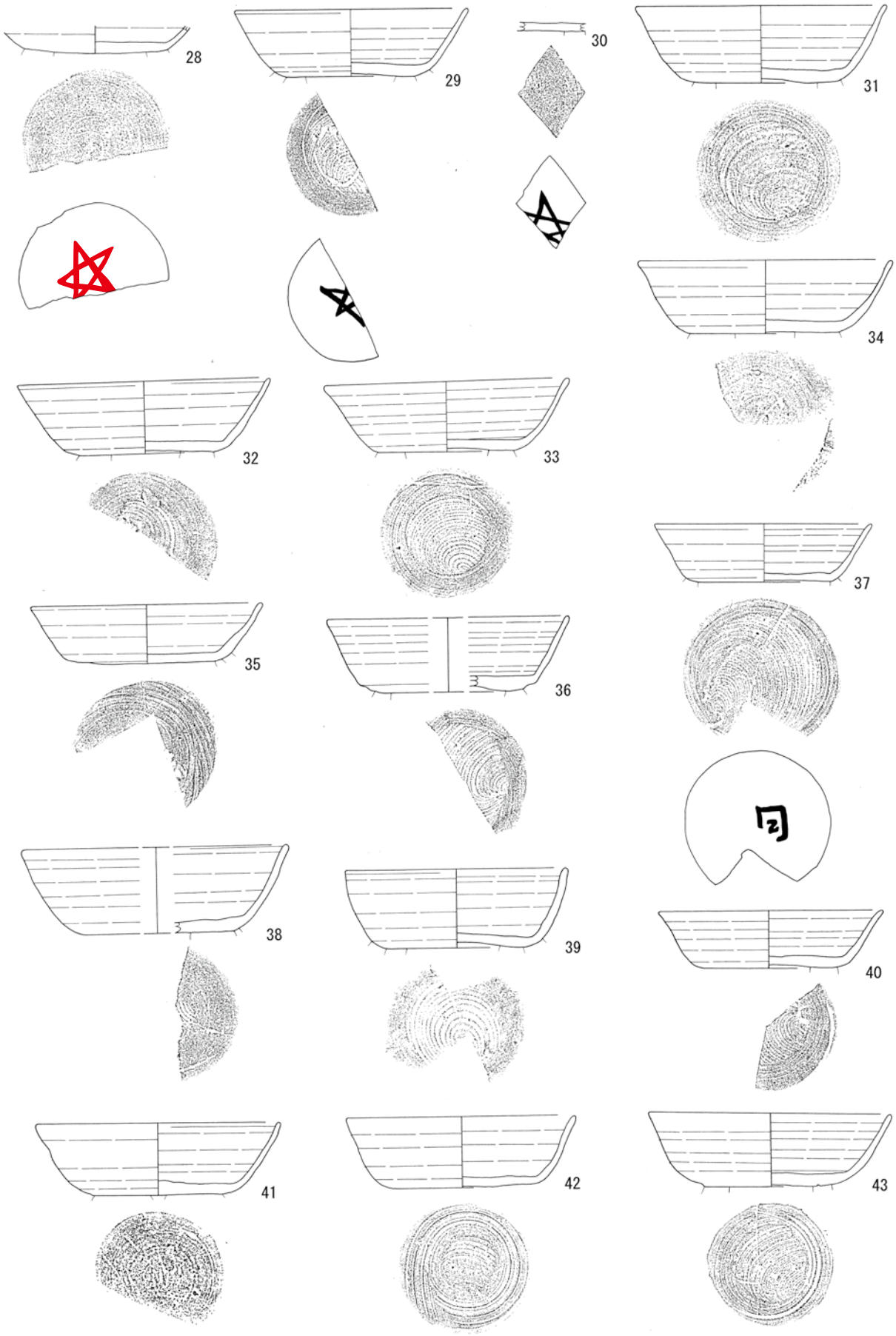
10は口径13.3cm、底径7.8cm、内底径8.8cm、器高3.9cm、11は口径13.2cm、底径8.5cm、内底径８cm、器高４cm、12は口径12.5cm、底径7.3cm、内底径7.9cm、器高3.9cm、13は口径13cm、底径７cm、内底径8.7cm、器高3.9cm、14は底径7.8cm、内底径8.5cm、15は口径13.9cm、底径8.3cm、内底径9.4cm、器高４cm、16は推定口径12.7cm、底径7.9cm、内底径7.9cm、器高3.6cm、17は口径12.7cm、底径8.1cm、内底径8.3cm、器高3.7cm、18は口径13.2cm、底径7.3cm、内底径7.8cm、器高4.1cm、19は口径13.1cm、底径7.9cm、内底径7.9cm、器高3.5cm、20は推定口径14.2cm、推定底径８cm、推定内底径9.2cm、器高3.6cm、21は推定口径11.9cm、底径7.9cm、内底径7.9cm、器高3.2cm、22は



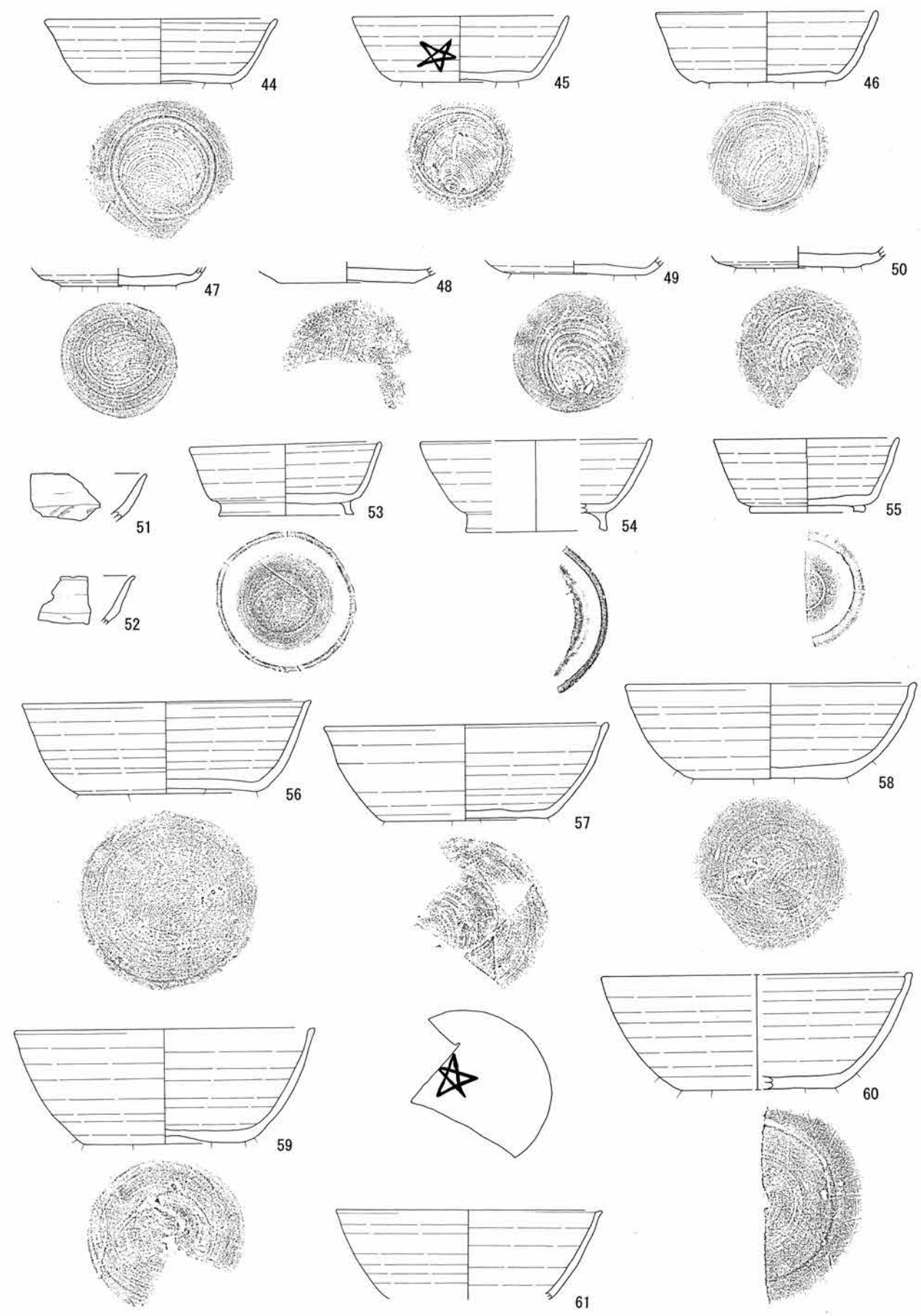
第９図　27号住居址出土遺物（１）(1/3)



第10図　27号住居址出土遺物（２）(1/3)



第11図　27号住居址出土遺物（３）(1/3)



第12図　27号住居址出土遺物（４）(1/3)

口径13cm、底径8.1cm、内底径８cm、器高3.8cm、23は口径12.8cm、底径８cm、内底径7.9cm、器高3.7cm、24は推定口径13cm、底径8.1cm、内底径８cm、器高3.6cm、25は推定口径12.7cm、底径7.8cm、内底径8.1cm、器高3.5cm、26は口径12.5cm、底径8.2cm、内底径８cm、器高3.7cm、27は口径13.1cm、底径7.9cm、内底径8.3cm、器高3.5cm、28は底径7.6cm、内底径7.6cm、29は推定口径12.3cm、推定底径6.8cm、内底径7.6cm、器高3.6cm、31は推定口径13.1cm、底径7.7cm、内底径8.5cm、器高4.1cm、32は推定口径13.4cm、推定底径7.2cm、推定内底径8.3cm、器高3.9cm、33は口径13cm、底径7.2cm、内底径7.9cm、器高3.8cm、34は推定口径13.5cm、推定底径7.8cm、推定内底径8.3cm、器高3.9cm、35は口径12.4cm、底径7.1cm、内底径7.7cm、器高3.1cm、36は推定口径12.7cm、推定底径7.8cm、推定内底径９cm、器高４cm、37は口径11.5cm、底径７cm、内底径７cm、器高3.2cm、38は推定口径14cm、底径8.2cm、器高4.6cm、39は推定口径11.8cm、底径7.4cm、推定内底径7.8cm、器高4.2cm、40は推定口径12cm、推定底径7.2cm、推定内底径7.8cm、器高3.1cm、41は口径12.9cm、底径6.8cm、内底径８cm、器高3.8cm、42は口径12.2cm、底径6.9cm、内底径8.2cm、器高3.8cm、43は口径12.8cm、底径6.6cm、内底径8.4cm、器高4.1cm、44は推定口径12.5cm、底径7.6cm、内底径7.7cm、器高3.5cm、45は推定口径11.7cm、底径6.2cm、内底径7.6cm、器高3.6cm、46は推定口径12cm、底径6.3cm、推定内底径7.7cm、器高3.9cm、47は底径6.2cm、推定内底径８cm、48は底径6.9cm、49は底径6.6cm、内底径7.8cm、50は底径6.8cm、内底径8.3cmをはかる。

51、52は土師器である。口縁部は器内外面に横ナデを施し、体部は篦削りを施す。

高台付坏形土器（第12図53～55・図版９－53～55）

53～55は器内外面にロクロ水挽き整形を施す。53の底部は回転糸切り後に高台を貼り付け、55の底部は回転篦削り後に高台を貼り付けている。53、55の体部は口縁部まで直線的に立ち上がり、54の体部は僅かに内彎しながら立ち上がる。53の高台は器外面側の端部が細かく打ち欠かれている。53～55は還元焔焼成である。

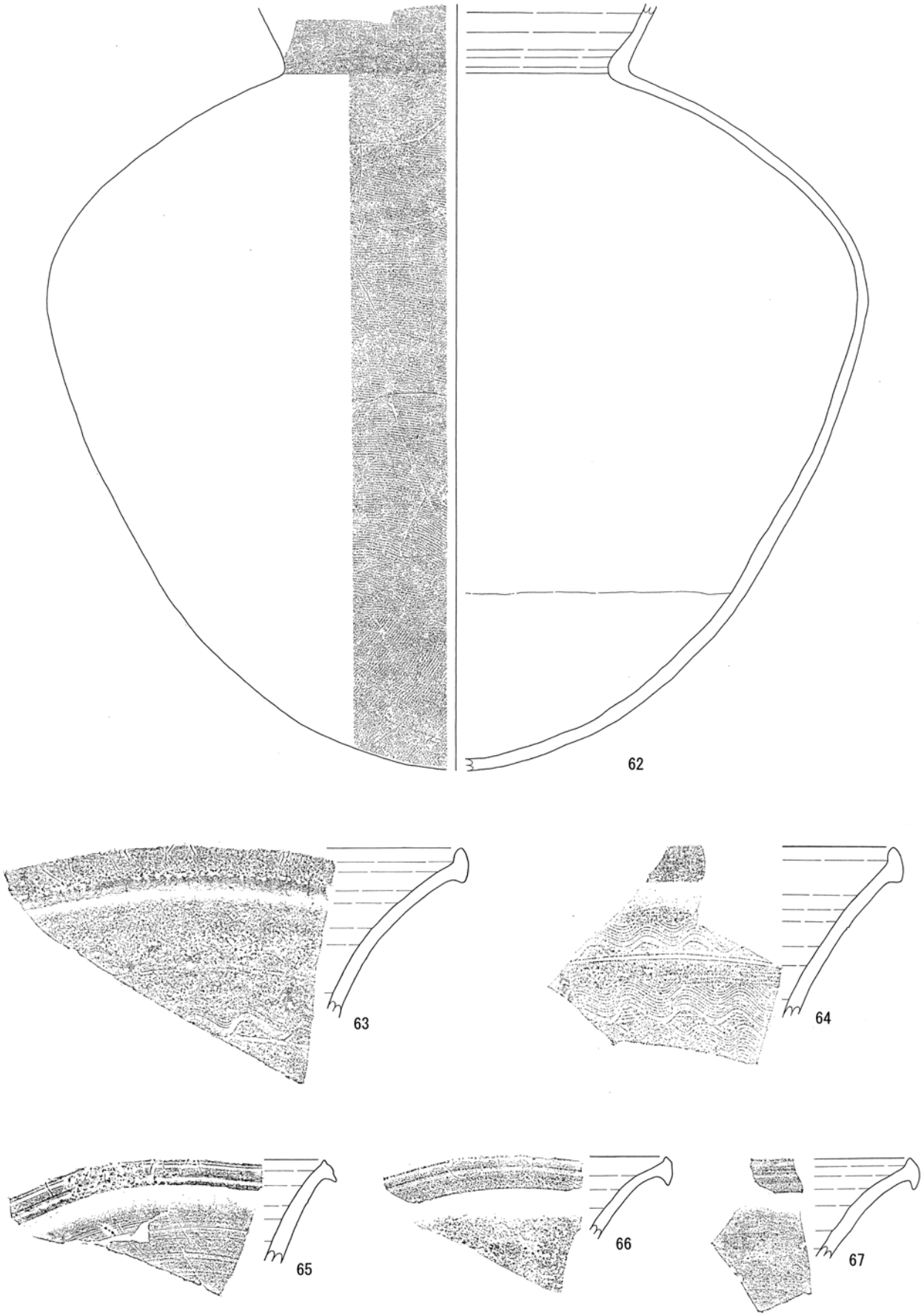
53は口径10.3cm、底径８cm、内底径7.5cm、器高４cm、高台径7.3cm、高台高0.7cm、54は推定口径12.4cm、推定底径7.6cm、推定内底径7.6cm、器高５cm、高台径7.5cm、高台高１cm、55は推定口径10cm、推定底径6.8cm、推定内底径6.7cm、器高４cm、推定高台径6.1cm、高台高0.4cmをはかる。

椀形土器（第12図56～61・図版９－56～60）

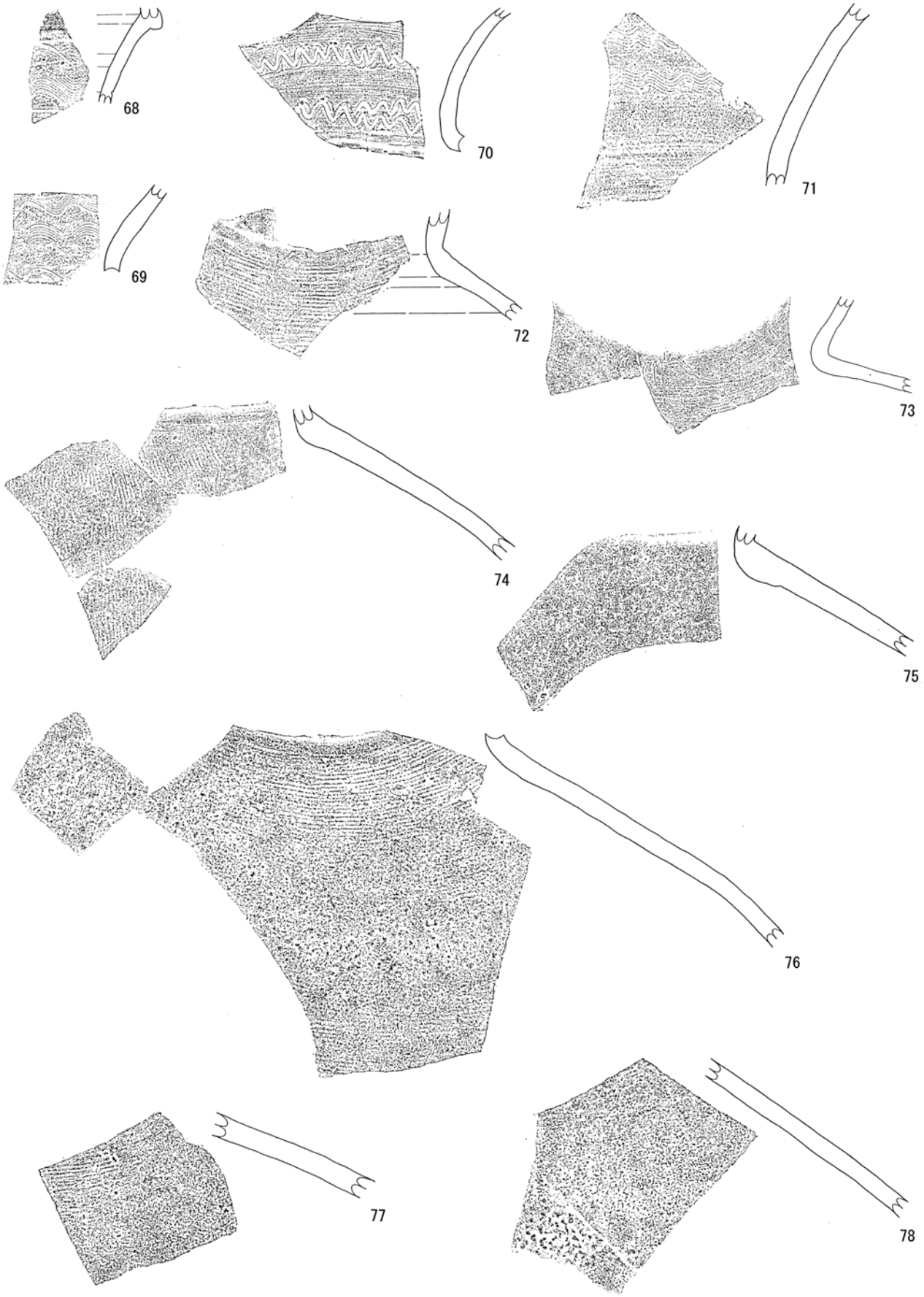
56～61は器内外面にロクロ水挽き整形を施す。56～58の底部には回転糸切り後、回転篦削りを施す。59、60の底部は全面回転篦削りを施す。57～60の体部下端には回転篦削りを施す。56～61は口縁部まで僅かに内彎しながら立ち上がる。56、61の口唇部は平坦となる。57の底部器外面には「☆」が墨書される。56～61は還元焔焼成である。56は胎土に白色針状物質を含む。

56は推定口径15.6cm、底径9.6cm、内底径9.6cm、器高５cm、57は推定口径15.4cm、推定底径8.8cm、推定内底径９cm、器高5.2cm、58は推定口径15.7cm、底径8.4cm、内底径9.5cm、器高5.2cm、59は口径16.1cm、底径8.5cm、内底径９cm、器高6.3cm、60は推定口径16.8cm、推定底径8.4cm、推定内底径9.5cm、器高6.2cm、61は推定口径14.4cmをはかる。

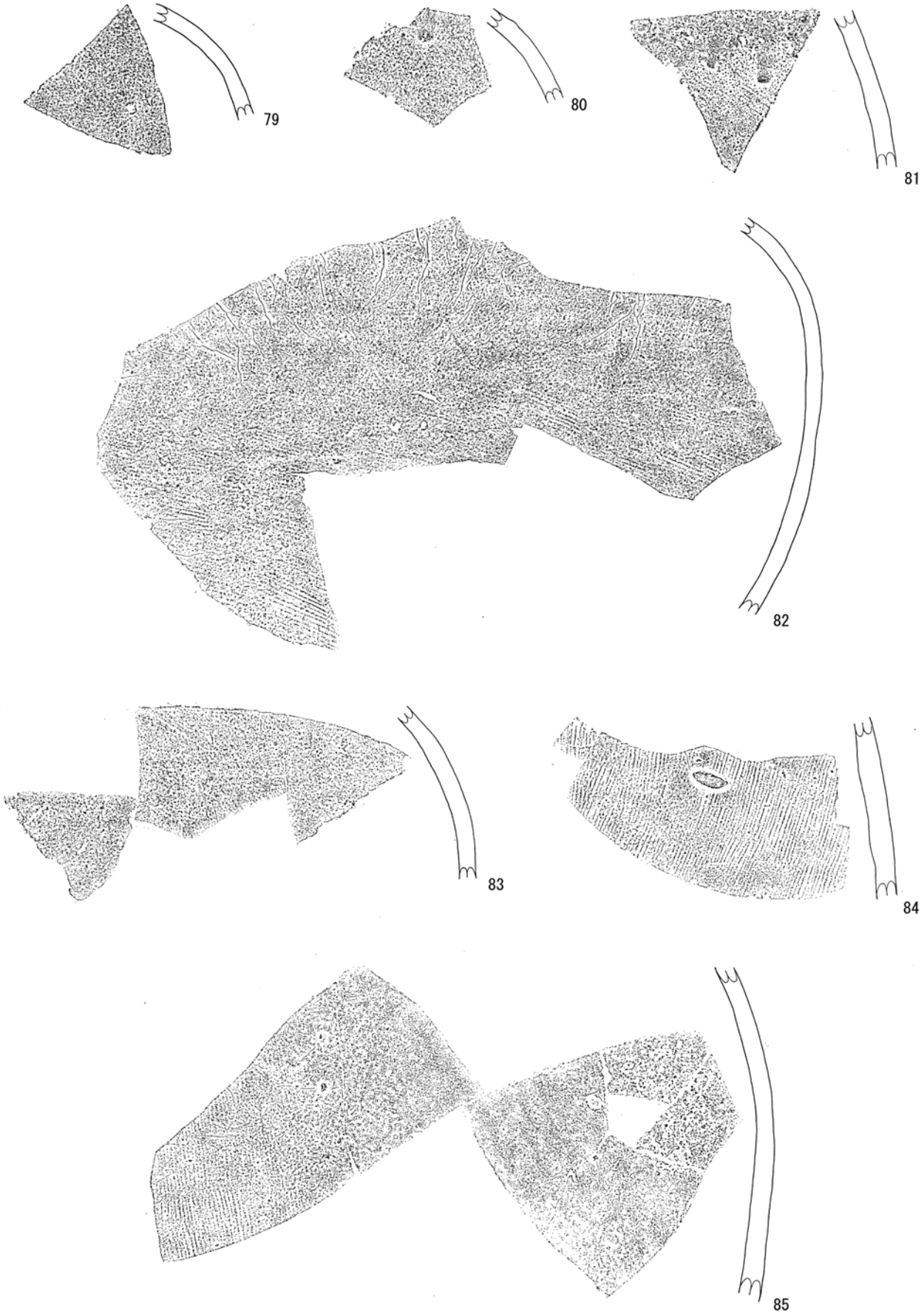
甕形土器（第13図62～67、第14図68～78、第15図79～85、第16図86～99、第17図100～108、第18図109、110・図版10－62～65、70、73～76、図版11－82～88、90、91、94～98、100、101、図版12－103～108、110）



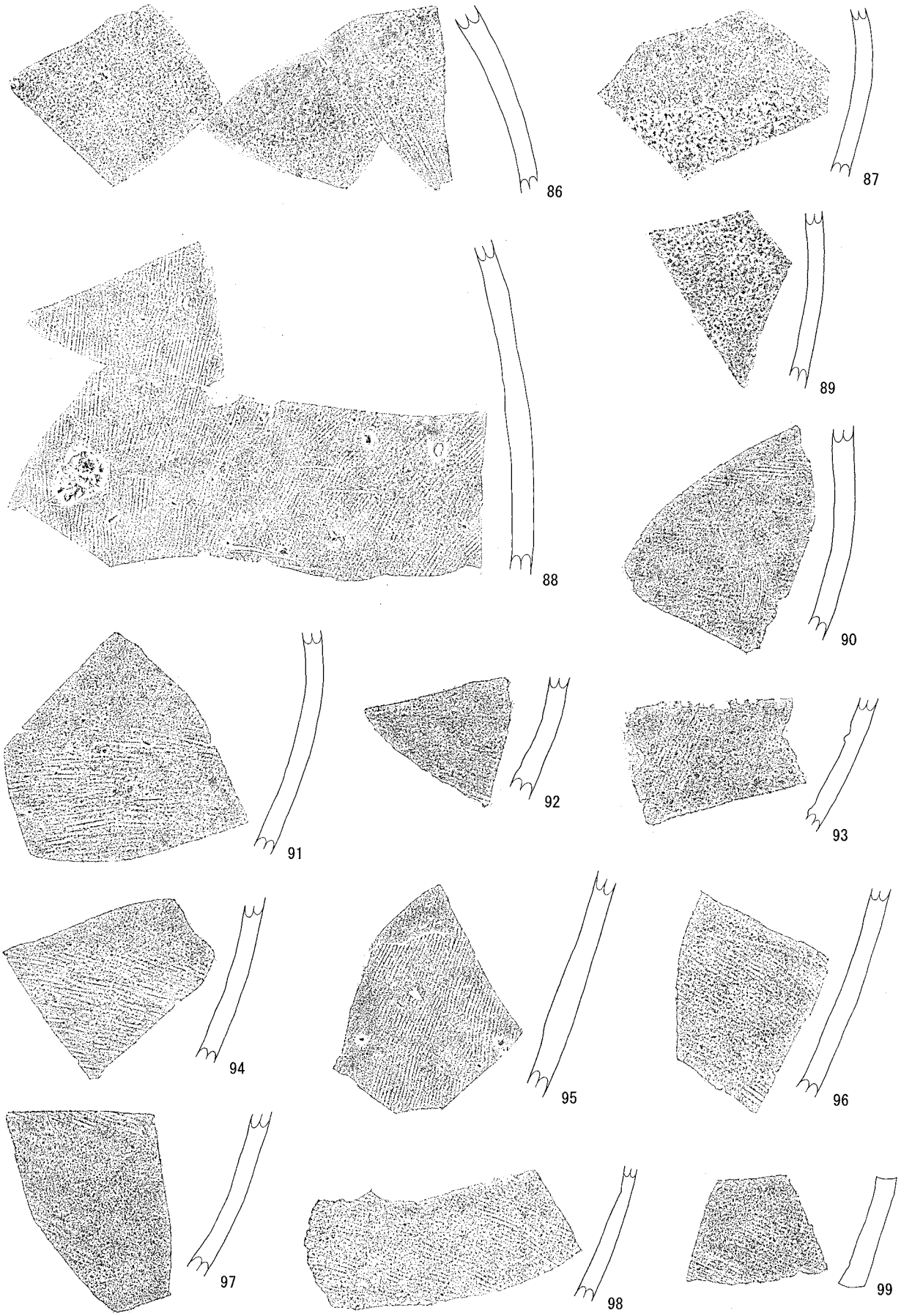
第13図　27号住居址出土遺物（５）(1/3)　但し、62は（1/6）



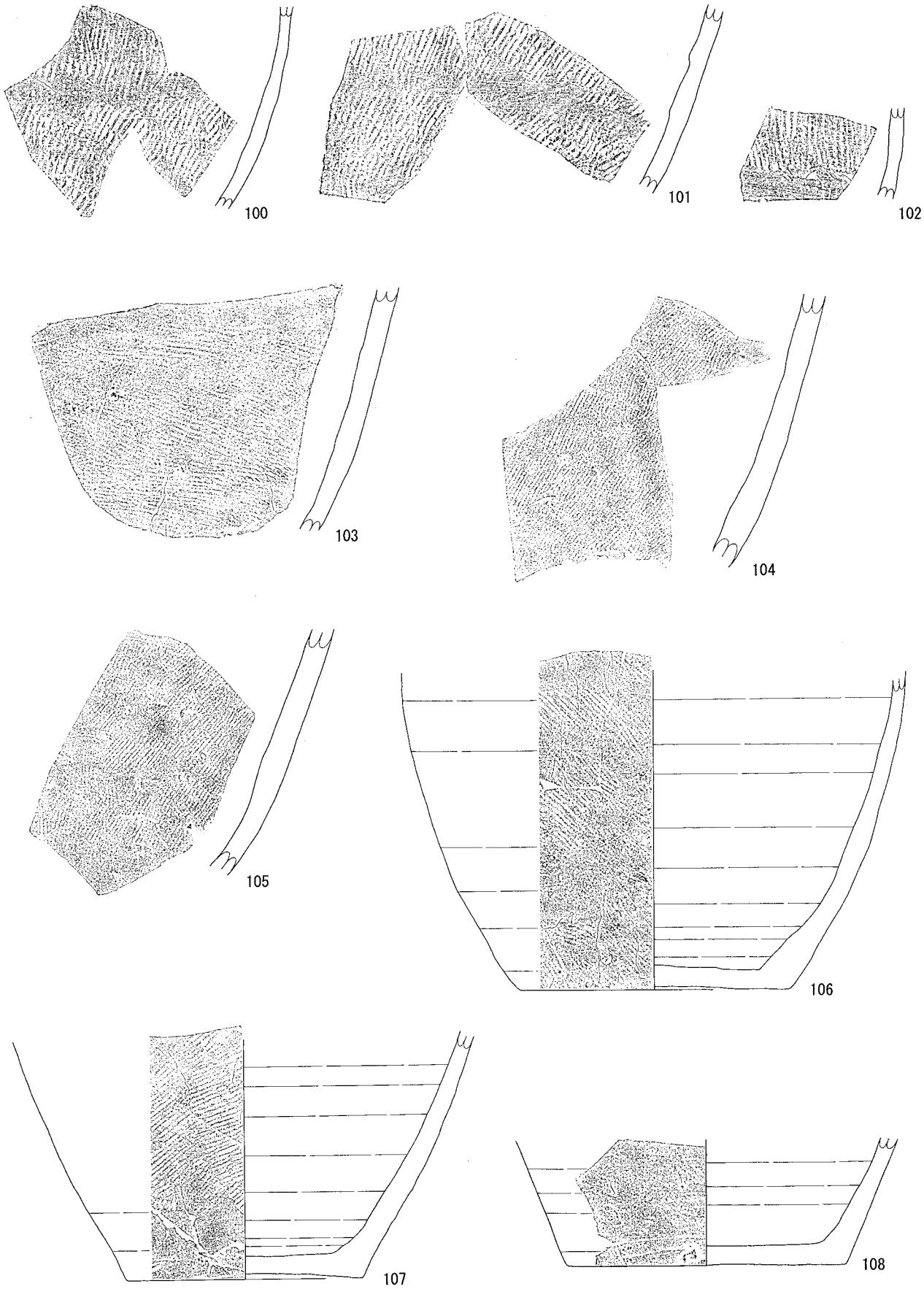
第14図　27号住居址出土遺物（６）(1/3)



第15図　27号住居址出土遺物（７）(1/3)



第16図　27号住居址出土遺物（８）(1/3)



第17図　27号住居址出土遺物（9）(1/3)

62～110は須恵器である。62は頸部から底部の大破片で、頸部器内外面にロクロ水挽き整形を施す。体部器内面にナデ、体部器外面に横・斜め方向に平行叩きを施す。頸部には２条の沈線が巡り、沈線を中心に16条１組の波状文が２段施される。推定最大胴部径87.5cm、底部から頸部までの推定残存高は82.5cmをはかる。

63～68は口縁部から頸部である。器内外面にロクロ水挽き整形を施す。63は頸部に２条の沈線が巡り、波状文が２段施される。64は頸部に２条の沈線が巡り、波状文が３段施される。上段は９条１組、中段は13条１組、下段の単位は不明である。68は頸部に18条１組の波状文が施され、その下に沈線が巡る。69～71は頸部である。69は頸部に６条１組の波状文が３段施される。70は頸部に太い１条の波状文が２段施される。下段の波状文は途中で２条になる。71は頸部に６条１組の波状文が２段施される。72、73は頸部から肩部である。器内外面にロクロ水挽き整形、肩部器外面に平行叩きを横方向に施す。

74～78は肩部である。肩部器内面にナデ、肩部器外面に平行叩きを縦方向に、76～78の肩部器外面は平行叩きを横方向に施している。79、80は肩部から胴部である。80の器内面には当て具痕が残る。

81～105は胴部である。81、83～86、88～91、93、94、97、99の器内面は当て具痕をナデで消している。87、92、95、96、98、100～105の器内面はナデを施している。81、82、84、85、88、93～105の器外面には平行叩きを斜め方向に、90、91は横方向に施す。103は内面に輪積みの痕跡が顕著に残る。87は覆土出土の破片と貼床下出土の破片が接合している。

106～110は胴部から底部である。106～109は平底を呈し、110は丸底を呈する。106～109の器外面はナデを施し、体部下端に篦削りを施す。底部器外面は篦削りが施される。110は篦削りにより底部を整形している。106、107、110の胴部器外面には平行叩きを斜め方向に施す。106～110の器内面にはナデを施す。焼成はすべて還元焔焼成である。67は胎土に白色針状物質を含む。106は底径14.5cm、107は底径12.8cm、108は底径14.9cmをはかる。

甕の内、胎土、色調、調整技法が似ているものがある。70、100～102、109の一群、73、77、92、99の一群、74、75、84、85、88、95、104、105、110の一群、81、86、89～91、93、94、97の一群は、それぞれ同一個体と思われる。76、78～80、82、87、96、98の一群は、28号住居址８も含め同一個体と思われる。

短頸壺形土器（第18図111・図版12－111）

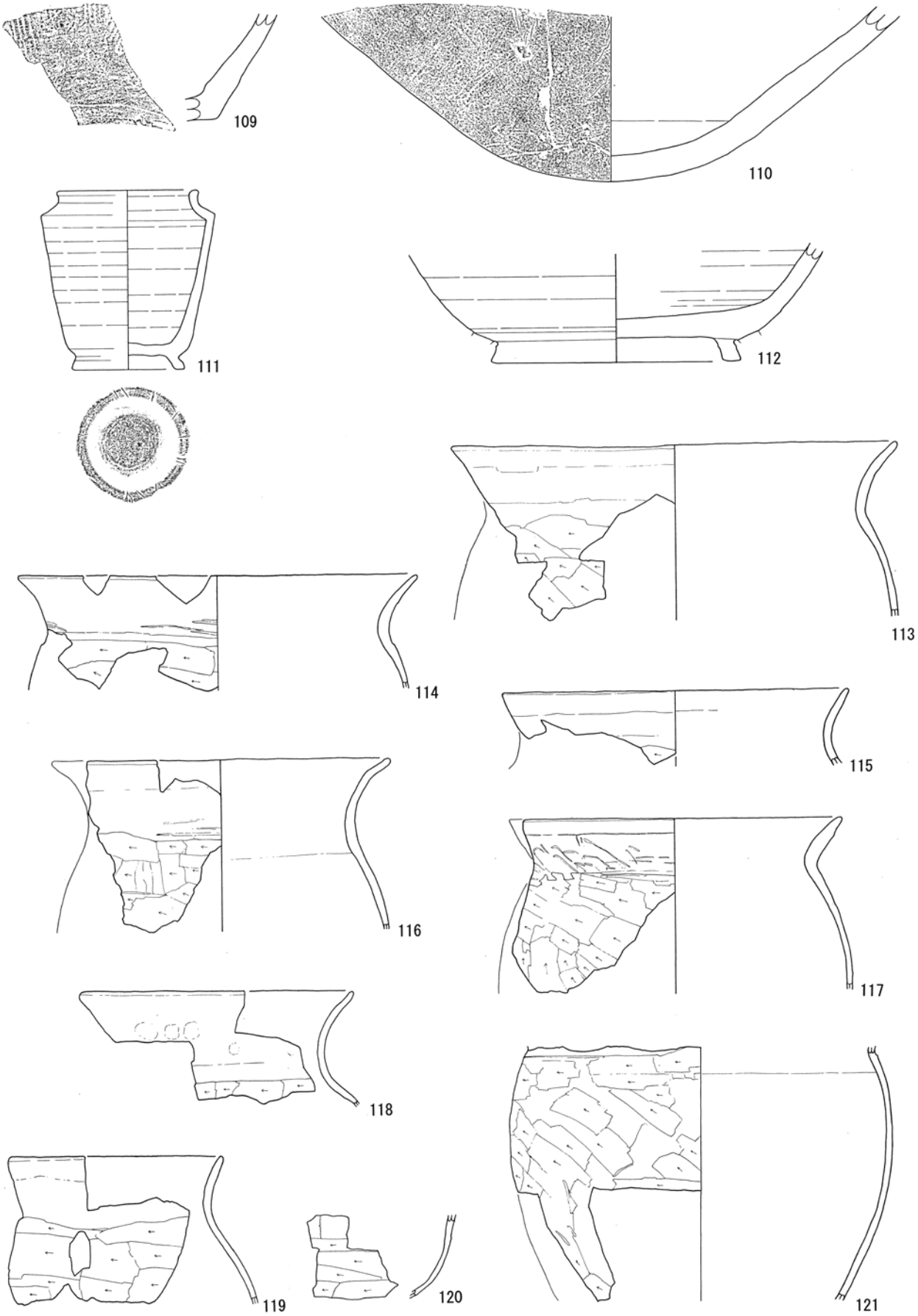
111は完形である。器内外面にロクロ水挽き整形を施し、底部は回転糸切り後、高台を貼り付けている。体部は直線的に立ち上がり、肩部は鋭角に屈曲する。口縁部は垂直に立ち上がる。焼成は還元焔焼成である。胎土に白色針状物質を含む。口径7.5cm、器高9.6cm、高台径5.8cm、高台高0.6cmをはかる。

壺形土器（第18図112・図版12－112）

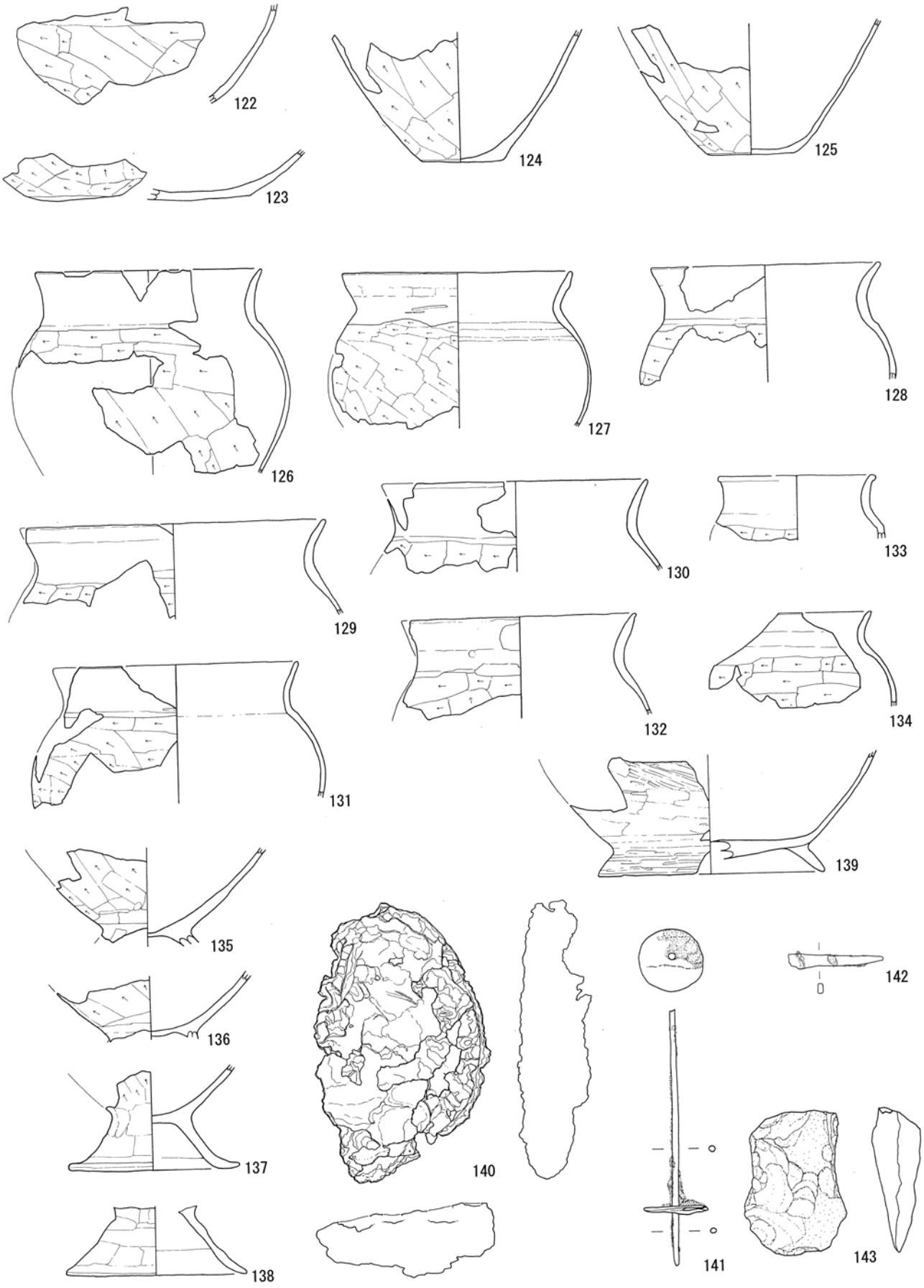
112は長頸壺の胴部から底部である。器内外面にロクロ水挽き整形を施し、胴部器外面下端に篦削りを施す。底部は回転篦削り後、高台を貼り付けている。焼成は還元焔焼成である。推定底径は13.3cm、推定高台径は13.4cm、高台高は1.1cmである。

甕形土器（第18図113～121、第19図122～125・図版13－113、114、117、121、123～125）

113～125は土師器である。113～121は口縁部から胴部である。口縁部器内外面に横ナデを施し、胴部器内面にナデ整形を施す。113、116、117は頸部直下に横方向の篦削り、胴部に斜め方向の篦削りを施し、114、115、118、119は頸部直下に横方向の篦削りを施す。113～115、117は頸部がくの字状を呈し、116、118、119の頸部は弧を描くように外反する。



第18図　27号住居址出土遺物（10）（1/3）



第19図　27号住居址出土遺物（11）（1/3）

120、121は頸部から胴部である。頸部器内外面に横ナデ、胴部器内面にナデ調整を施す。121は底部器内面に篦ナデ、ナデ調整を施す。120は頸部直下に横方向の篦削り、121は頸部直下に横方向、胴部に斜め方向の篦削りを施す。122は胴部である。器内面は篦ナデ、ナデ整形、器外面は斜め方向の篦削りを施す。

123～125は胴部から底部である。器内面は篦ナデ、ナデ整形を施し、底部器外面は篦削り、胴部器外面は斜め方向の篦削りを施す。

113は推定口径23.9cm、114は推定口径21.4cm、115は推定口径18.5cm、116は推定口径18.2cm、117は推定口径17.8cm、124は底径4.5cm、125は底径4.8cmをはかる。

台付甕形土器（第19図126～138・図版13－126～128、132、133、図版14－135、137、138）

126～134は口縁部から胴部である。口縁部器内外面に横ナデを施し、胴部器内面はナデ整形を施す。126、127、131は頸部直下に横方向の篦削り、胴部に斜め方向の篦削りを施す。126、128、133の頸部は緩く外反し、127、129～132、134の頸部はくの字状を呈する。128～130、132～134は頸部直下に横方向の篦削りを施す。135～137は胴部から脚部である。135、137の器内面には篦ナデ、ナデ調整を施し、136の器内面にはナデ調整を施す。135、136の胴部器外面は斜め方向、胴部下端には横方向の篦削りを施す。137は胴部器外面に斜め方向の篦削りを施し、脚部は器内外面に横ナデを施す。138は脚部である。器内外面に横ナデを施している。

126は推定口径12.4cm、127は推定口径12.6cm、128は推定口径12.8cm、129は推定口径16.8cm、130は推定口径14.6cm、131は推定口径13.4cm、132は推定口径12.9cm、133は推定口径8.6cm、137は底径9.5cm、138は底径9.9cmをはかる。

高台付椀形土器（第19図139・図版14－139）

139は高い高台の付く土師器の椀である。体部器外面から高台部器外面に丁寧な磨きを施し、器内面にはナデ整形を施す。高台部は器内外面に横ナデを施す。推定高台径12.4cm、高台高1.5cmをはかる。

漆塊（第19図140・図版14－140）

140は漆塊である。表面は風化し茶褐色を呈するが、断面をみると黒色である。平滑な部分もあるが、全体に乾燥して収縮した際の縮みによると思われる細かな皺がある。側面が丸くカーブしており、桶などの容器に貯蔵していた漆が固化したものの可能性がある。残存長は15.6cm、幅9.6cm、厚さ3.6cmをはかる。140は自然科学分析を実施した。結果は第４章に記載している。

紡錘車（第19図141・図版14－141）

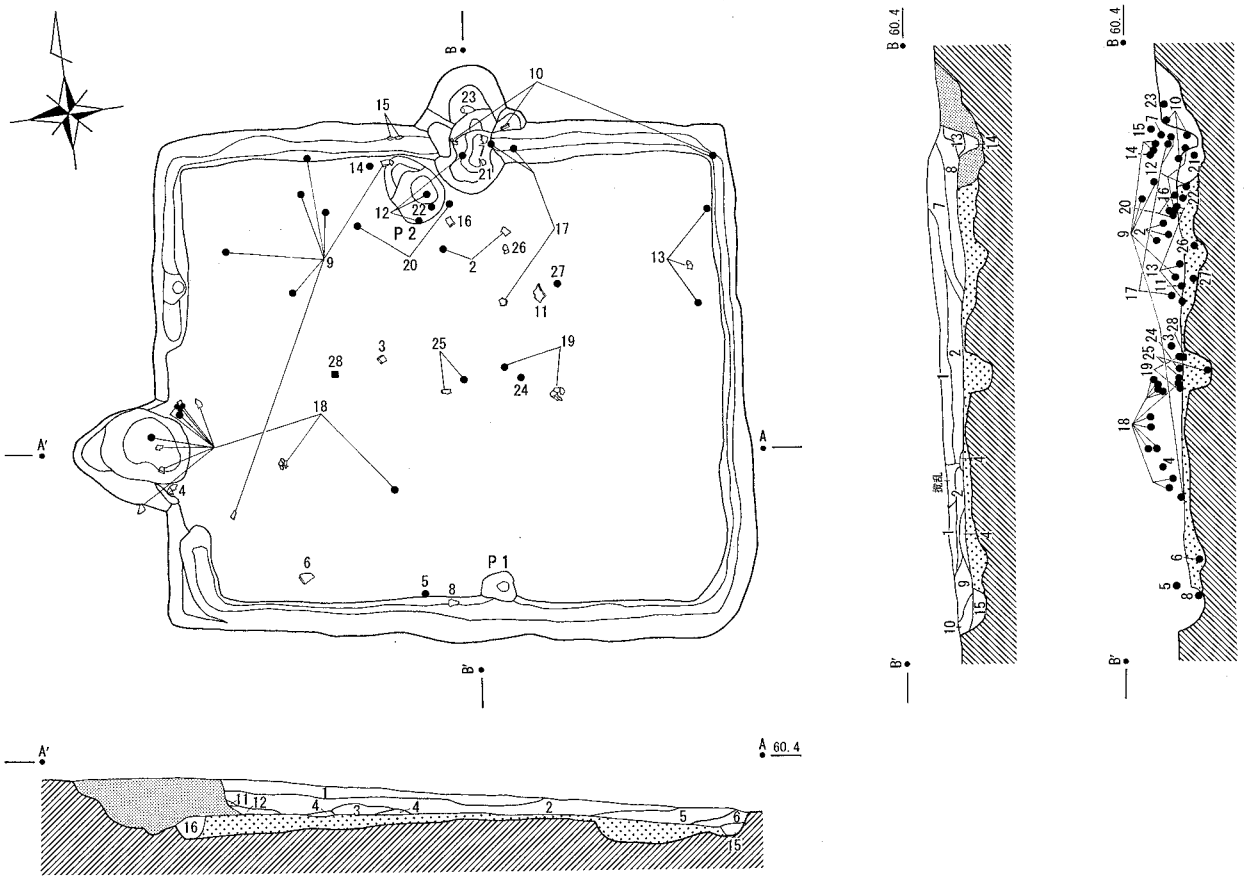
141は鉄製紡錘車である。紡茎の上端部を欠損している。紡茎の残存長は14.1cm、太さ0.4cm、紡輪は直径3.5cm、厚さ0.2cmをはかる。

刀子（第19図142・図版14－142）

142は刀子の破片である。片関造りで関部から先の刃部は欠損している。茎部の断面形は長方形を呈し、茎部の幅は0.6cm、厚さ0.3cmをはかる。関部の幅は0.8cmをはかる。

打製石斧（第19図143）

143は基部を欠損するが、分銅形を呈する打製石斧である。刃部、両側縁に調整剥離を施す。石質は砂岩である。



28号住居址

1層　暗褐色土　ローム粒子、ロームを少量含み、焼土粒子、炭化物粒子を微量含む。
2層　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子を少量含み、炭化物粒子を微量含む。
3層　暗褐色土　焼土粒子、粘土粒子を少量含み、ローム粒子、炭化物粒子を微量含む。
4層　暗褐色土　焼土粒子、粘土粒子を少量含む。
5層　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子を微量含む。
6層　暗褐色土　ローム粒子、ロームを少量含む。
7層　暗褐色土　焼土粒子を少量含み、炭化物粒子を微量含む。
8層　暗褐色土　焼土粒子を少量含み、粘土ブロック、炭化物粒子を微量含む。
9層　暗褐色土　焼土粒子、炭化物粒子を少量含む。
10層　暗褐色土　ロームを少量含み、ローム粒子を微量含む。
11層　暗褐色土　ローム粒子、焼土粒子、炭化物粒子を微量含む。
12層　暗褐色土　焼土粒子を少量含み、ローム粒子を微量含む。
13層　赤茶褐色土　焼土粒子を含み、粘土ブロックを少量、ロームブロックを微量含む。
14層　茶褐色土　焼土粒子を少量含む。
15層　暗褐色土　ローム粒子、ロームを少量含む。
16層　暗褐色土　ローム小ブロック、焼土粒子を微量含む。

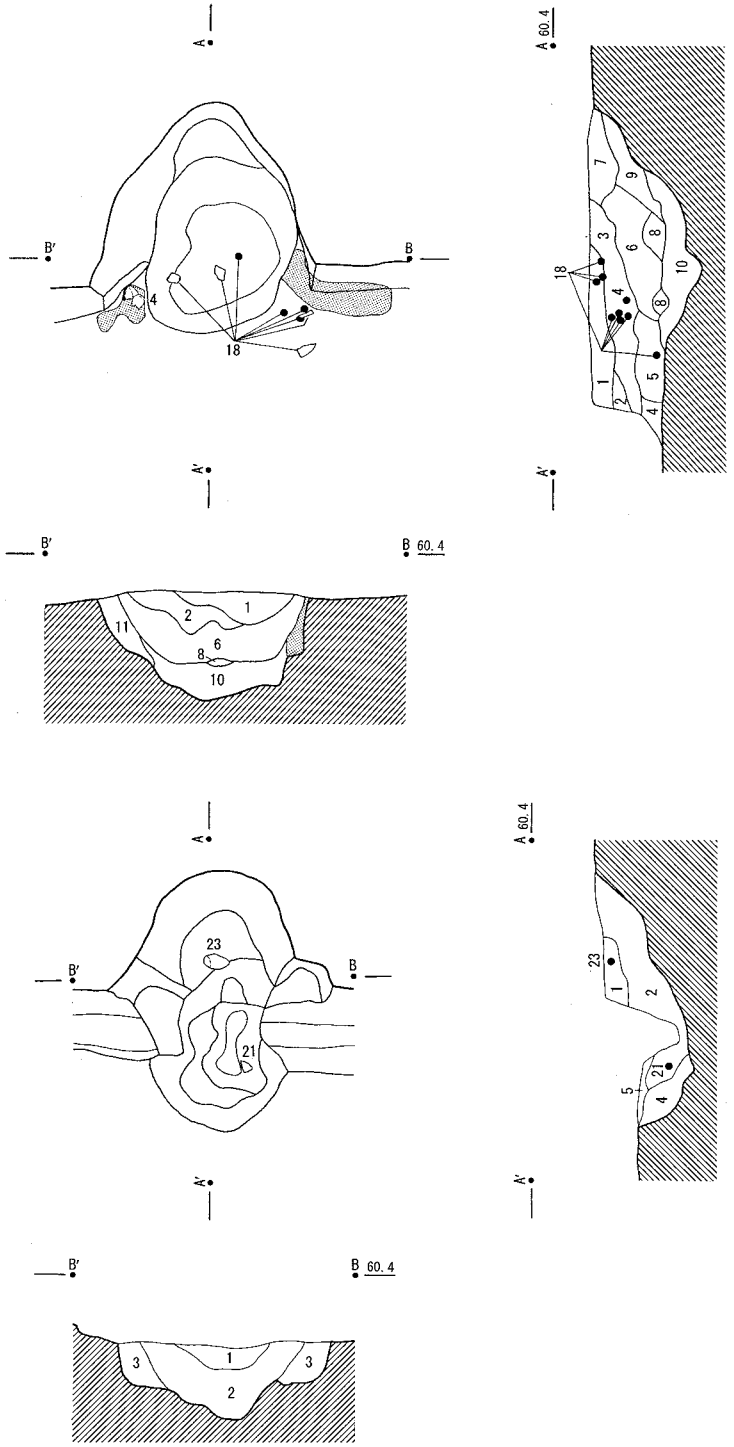
第20図　28号住居址（1/60）

３：28号住居址

本住居址は調査区の中央東寄りで検出した。遺存状態は良好である。平面プランは長方形を呈し、東西4.7m、南北4.1mをはかる。主軸方位はＮ－84°－Ｗを示す。壁高は10～36cmをはかり、傾斜を持って立ち上がる。カマドは西壁と北壁で検出した。袖の粘土と周溝の状況から、北壁から西壁へ移設したものと考えられる。床面は平坦で締まりがあり、特に両カマド前から住居中央、南壁寄りにかけて良好に硬化している。また、北カマド付近の貼床には焼土粒子の混入が目立つ。周溝は幅14～25cm、深さ４～15cmで壁に沿って全周するが、西カマド付近は移設時に埋め戻されている。

柱穴は２本検出した。Ｐ１は住居中央の南壁寄りで検出した。入口に伴うものと推定される。径24cm、深さ18cmをはかる。Ｐ２は楕円形を呈し、長軸54cm、短軸38cm、深さ19cmをはかる。

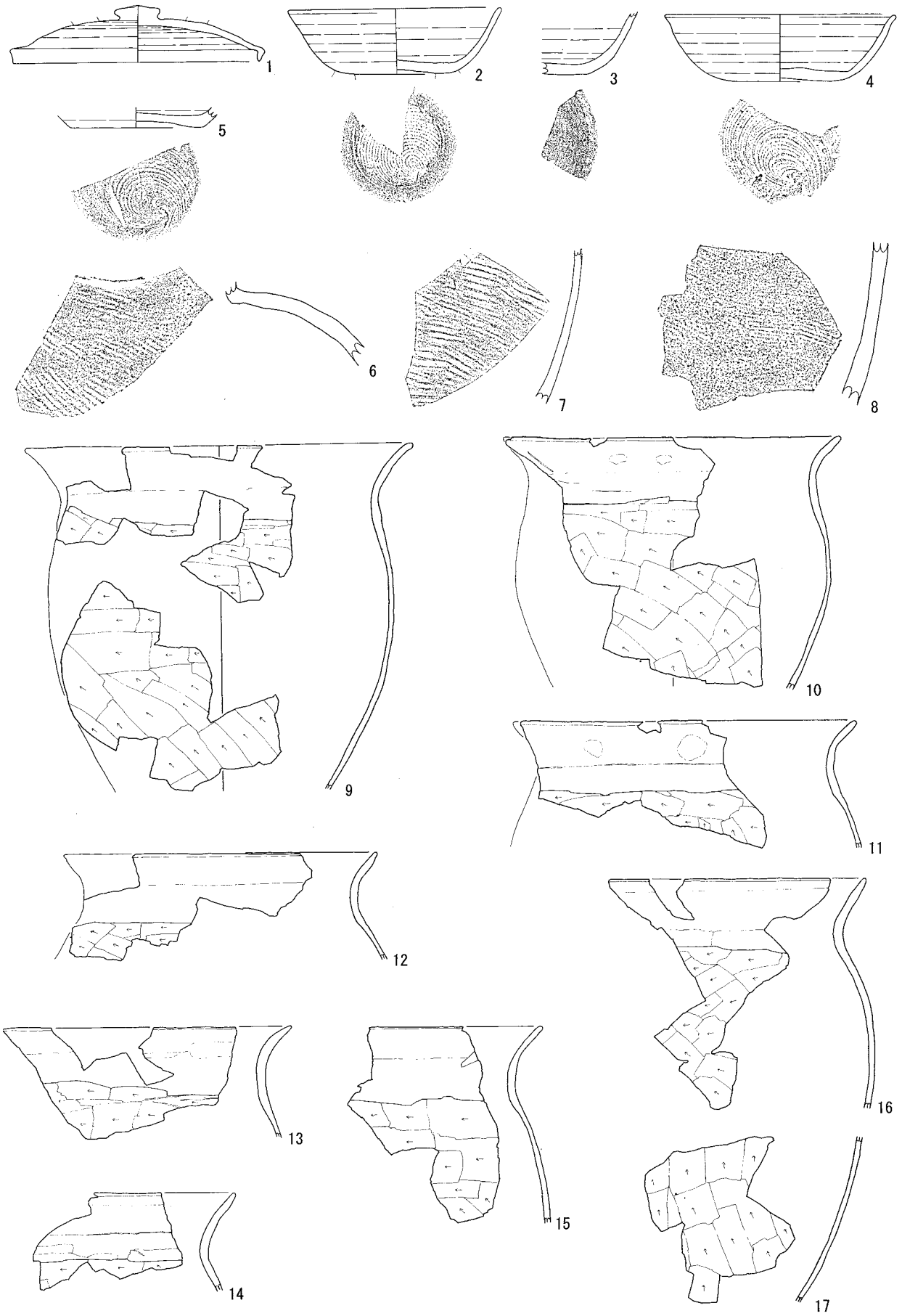
貼床下は、壁沿い及び四隅が落ち込む。北東コーナー側では、粘土ブロックを多く含む部分が認められる。住居中央から長軸34cm、短軸28cm、深さ22cmの柱穴状の掘り込みが検出された。



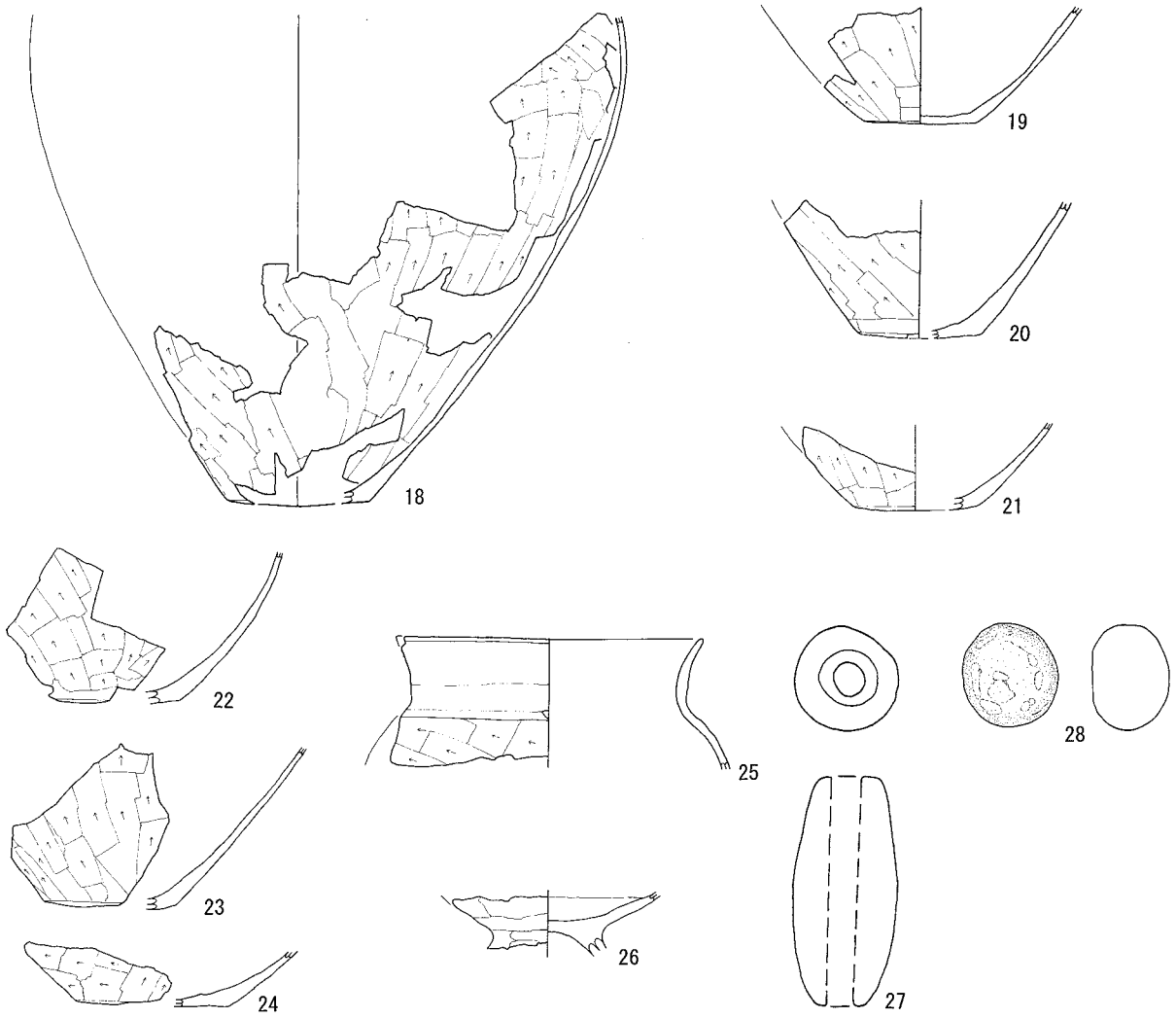
第21図　28号住居址カマド（1/30）

西カマド

カマドは西壁のやや南寄りに位置する。構築時に、周溝を一部埋め戻している。規模は幅89cm、奥行90cmで、平面プランはV字状を呈する。壁外へ68cm掘り込んでいる。火床部は幅43cm、奥行44cmをはかる。不整円形を呈し、床面から12cm掘り下げている。火床部から煙道部は、段を持って緩やかに立ち上がる。両袖に基礎の一部と思われる粘土が残る。



第22図　28号住居址出土遺物（1）(1/3)



第23図　28号住居址出土遺物（２）(1/3)　但し、27は（2/3）

北カマド

カマドは北壁の中央に位置する。規模は幅89cm、奥行102cmで、平面プランはＵ字状を呈する。壁外へ46cm掘り込んでいる。火床部は幅35cm、奥行41cmの楕円形を呈し、床面から22cm掘り下げている。火床部から煙道部は、段を持って緩やかに立ち上がる。

出土遺物

12、22、26、27は貼床下から出土している。

蓋形土器（第22図１・図版14－１）

１は器内外面にロクロ水挽き整形を施し、天井部器外面に回転篦削りを施す。天井部は緩やかに彎曲しながら開き、口縁部は内屈する。扁平な擬宝珠状つまみを有する。焼成は還元焔焼成である。口径13.3cm、器高3.1cmをはかる。

坏形土器（第22図２～５・図版14－２、図版15－４）

２～５は器内外面にロクロ水挽き整形を施す。２の底部は回転糸切り後、外周部回転篦削りを施す。３

の底部は回転篦削りを施す。４、５の底部は回転糸切りを施す。２～４の体部は僅かに内彎しながら立ち上がり、４は口縁部が外反する。３は器外面の体部下端に差し込み痕が残る。焼成は２、４、５が還元焔焼成、３は半還元焔焼成である。２、４は胎土に白色針状物質を含む。

２は推定口径11.4cm、底径6.6cm、内底径6.2cm、器高3.6cm、４は推定口径12.4cm、底径6.5cm、推定内底径7.3cm、器高3.6cm、５は推定底径７cm、推定内底径6.8cmをはかる。

甕形土器（第22図６～17、第23図18～24・図版15－６、８～11、13、16、18～20、24）

６～８は須恵器である。６は肩部で、器内面に当て具痕が残り、器外面には平行叩きを斜め方向に施す。７、８は胴部の破片である。器内面に当て具痕が残り、器外面には平行叩きを斜め方向に施す。焼成はすべて還元焔焼成である。８は、27号住居址出土の76、78～80、82、87、96、98と胎土や色調、調整が似ており、同一個体の破片と思われる。

９～24は土師器である。９～16は口縁部から胴部である。口縁部器内外面に横ナデを施し、胴部器内面はナデ整形を施す。９、10、15、16は頸部直下に横方向の篦削り、胴部に斜め方向の篦削りが施され、11～14は頸部直下に横方向の篦削りが施される。９、10、14の頸部はくの字状を呈し、11～13、15の頸部は崩れたコの字状を呈する。17は胴部である。器内面はナデ整形を施し、器外面は縦方向の篦削りを施す。

18～24は胴部から底部である。18、19、22～24は器内面に篦ナデ、ナデ整形を施し、20、21はナデ整形を施す。18～23は胴部器外面に斜め方向の篦削り、24は縦、斜め方向の篦削りを施す。底部器外面はすべて篦削りである。16、17は同一個体と思われる。

９は推定口径20.8cm、10は推定口径18.4cm、11は推定口径18.6cm、12は推定口径16.8cm、18は推定底径5.7cm、19は底径4.5cm、20、21は推定底径５cmをはかる。

台付甕形土器（第23図25、26・図版15－25）

25、26は土師器である。25は口縁部から胴部である。口縁部は器内外面に横ナデを施す。胴部器内面はナデ整形を施し、胴部器外面は斜め方向の篦削りを施す。26は胴部から脚部である。胴部器内面はナデ整形を施し、胴部器外面に斜め方向の篦削りを施す。25は推定口径12.4cmをはかる。

土錘（第23図27・図版15－27）

27は円筒形で、中央部が少し膨らむ。色調は黒色で、胎土に白色針状物質を含む。長さ4.7cm、最大径2.1cm、孔径0.6cm、重さ21ｇをはかる。

磨石（第23図28・図版15－28）

28は球形で、全面に磨痕がみられる。上面に平坦面があり、特に磨痕が顕著である。石質は軽石である。長さ4.2cm、重さ26.1ｇをはかる。

第４章　自然科学分析

本調査において、27号住居址覆土上層から出土した遺物（第19図140）は、その形状から漆紙の可能性があるのではないかと思われたが、判然としなかった。遺物の性質・特徴を把握するため、科学分析を実施した。

若宮遺跡出土漆塊のＸ線透過撮影・塗膜分析

藤根　久・竹原弘展（パレオ・ラボ）

1. はじめに

日高市大字女影字八郎関地内に所在する若宮遺跡の第51次調査において、漆塊が出土した。この漆塊の構成物と材質を調べるために、塗膜分析を行った。なお、紙繊維を確認するためにＸ線透過撮影も行った。

2. 試料と方法

試料は、奈良・平安時代の27号住居跡から出土した漆塊1点である（表1、図版1-1、2）。

分析は、漆塊の薄片を作製し、構成物の観察と材質について調べた。この漆塊は、長軸15.6cm、短軸9.6cm、厚さ3.6cmで、破断面において厚さ0.5mm弱の波打った薄紙状物が複数条に見られる（図版1-1a、1b、図版2-1）。

漆塊は、大型の個体（図版1-1a、1b）と、この一部から剥離した小型の個体（図版2-1）からなる。

表1　分析を行った試料

分析No.	遺物	遺構	時期	試料No.	肉眼的な特徴	分析項目
1	漆塊	27号住居跡	奈良・平安時代	365	表面：主に黒色（10YR 2/1）、縮皺を伴う褐色光沢物付着、空隙有　破断内部：明黄褐色（10YR 6/6）、紙片状物有	Ｘ線透過撮影 塗膜分析

以下に、Ｘ線透過撮影と塗膜分析に分けて述べる。

2.1. Ｘ線透過撮影

撮影試料は、大型の個体について行った。

撮影には、Ｘ線透過検査装置（リガク製ラジオフレックス200EGM2）を使用した。撮影条件は、管電圧：140kV、管電流：5mA、照射時間：15秒間、照射距離：0.75mである。また、スズ2.8mmのフィルタを使用した。撮影媒体にはイメージングプレート（富士フィルム製ST-VI）を使用し、IPスキャナー（リガク製CR-1012）、25μmピッチ（1000dpi相当）で読み取った。

2.2. 塗膜分析

小型の個体の方の試料について、実体顕微鏡およびマイクロスコープによる観察を行い、脱落した小破片を用いて薄片作製と赤外分光分析を行った。

脱落した小破片（長さ8mm×5mm）の薄紙状物の平坦面と直交する断面薄片を作製した。薄片の作製では、まず試料全体にエポキシ系樹脂を含浸させて固化処理を行った。固化した後、スライドグラスに貼り付けて精密岩石薄片作製機で厚さ80μmの薄片を作製し、さらに研磨フィルム（三共理化株式会社製、

#1000,#2000,#4000)を用いて厚さ20μm前後の薄片を作製した。薄片は、実体顕微鏡、マイクロスコープ(株式会社キーエンス製VHX-8000)、電子顕微鏡（日本電子株式会社製JSM-5900LV）を用いて、組織と構成物について観察した。

赤外分光分析では、小型の漆塊表面の縮皺を伴う褐色光沢物と、破断内部の明黄褐色部分の2カ所について測定した。各試料は、手術用メスを用いて少量（0.5mm角程度）を削り、厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に押しつぶし、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光株式会社製FT/IR-410、IRT-30-16）を用いて、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。測定条件は、測定面積100μm角、測定時間200secである。同定は、市販の生漆の赤外吸収スペクトルと比較して行った。

表2　生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆		
	位置	強度	ウルシ成分
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1627.63	48.8465	
5	1454.06	47.1946	
6	1353.78	50.7910	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1216.86	47.5500	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

なお、赤外吸収スペクトル図の縦軸は透過率（%R）、横軸は波数（Wavenumber（cm-1）；カイザー）を示す。吸収スペクトルに示した数字は、生漆の主な赤外吸収位置を示す（表2）。

3. 結果および考察

以下に、X線透過撮影と塗膜分析に分けて述べる。

3.1. X線透過撮影

X線透過撮影では、全体的に透過は極めて良好であった。不鮮明であるものの、破断面に見られた波打った薄紙状物が撮影された。なお、全体的に同質物で構成され、特に異質物は写っていない（図版1-2a、2b）。

3.2.塗膜分析

漆塊薄片のマイクロスコープによる観察では、波打った薄紙状物が明黄褐色の厚さ0.5mm弱の緻密な層（図版2-4の赤枠dとe）と空隙のある部分（図版2-4の赤枠bとc）が観察された。

電子顕微鏡の観察では、厚さ0.5mm弱の緻密な層（図版2-4の赤枠dとe）において、直径約10μm前後のほぼ円形の断面形が密に分布していた（図版3-d2、e2）。また、空隙のある部分（図版2-4の赤枠bとc）においても同様の断面形が散在していた（図版3-b2）。なお、この円形の断面形を取り囲む部分は漆質と思われるが、この円形の断面形は、周辺部と剥離した部分において内部に連続するため、繊維状物と考えられる。また、この側面は滑らかではなく、模様と思われる形態が見られた（図版3-d2、d3）。

大型の漆塊表面の縮皺を伴う褐色光沢物の赤外分光分析では、炭化水素の吸収（吸収No.1およびNo.2）が確認され、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収（吸収No.6～ No.8）が明瞭に確認された（図1-1）。一方、破断内部の明黄褐色部分の赤外分光分析では、炭化水素の吸収（吸収No.1およびNo.2）が確認されるものの、ウルシオールの吸収は確認されず、吸収No.9付近に劣化に伴うゴム質の大きな吸収が見られた（図1-2）。

4. まとめ

赤外分光分析の結果、この漆塊表面の縮皺を伴う褐色光沢物は漆であった。一方、破断内部の明黄褐色部分は、劣化した漆と考えられる。

Ｘ線透過撮影では、不鮮明であるが、破断面に見られた波打った薄紙状物が撮影され、特にその他の異質物は撮影されなかった。

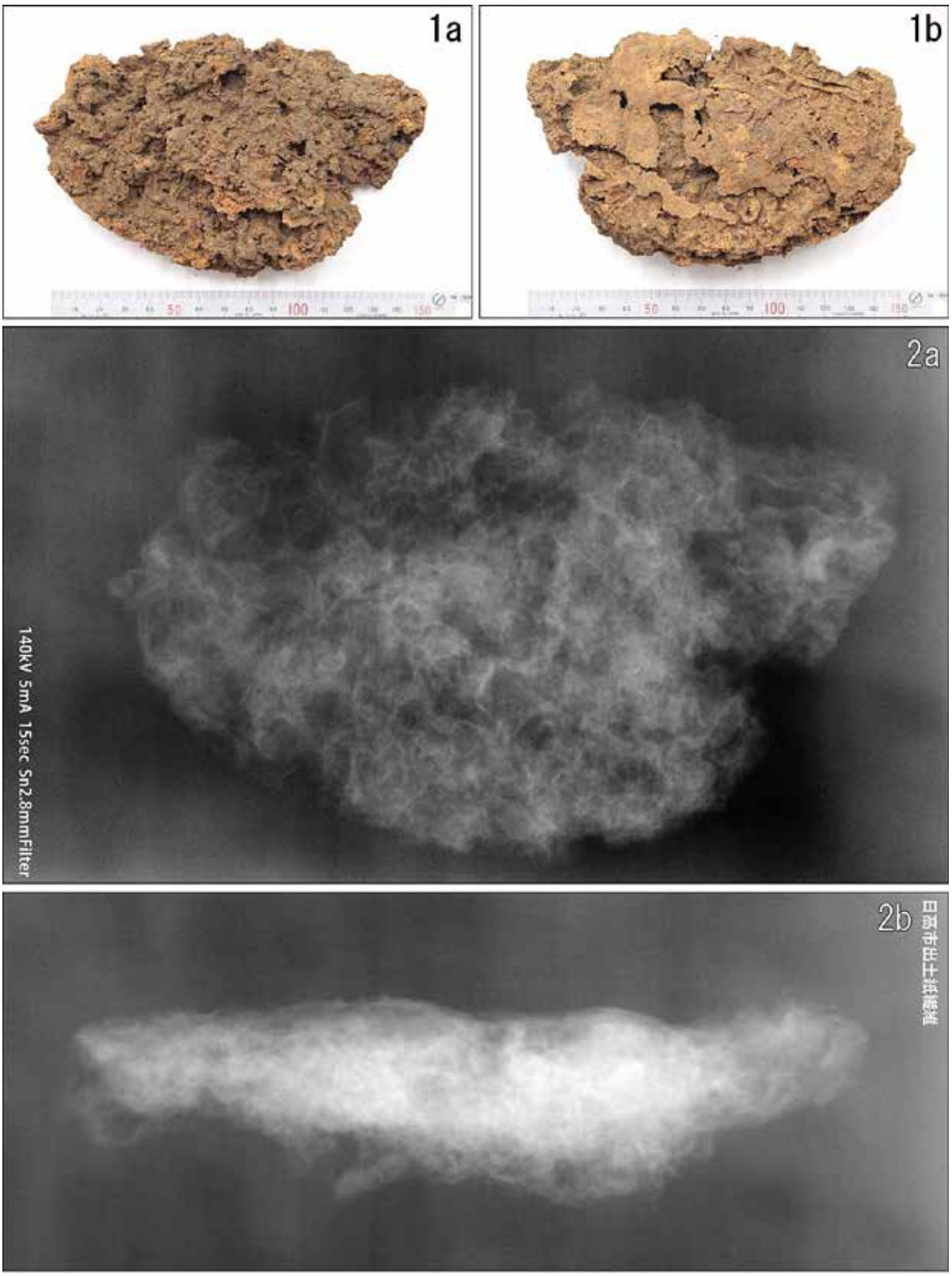
電子顕微鏡の観察では、直径約10μm前後のほぼ円形からなる断面形が確認され、繊維状物であることが観察された。また、この側面は滑らかではなく、模様と思われる表面形態が見られた。

奈良時代の紙は麻が主であり（麻紙（まし））、ついで楮（穀紙（こくし））、雁皮（斐紙（ひし））が用いられていたが、麻紙はしだいに使われなくなった（鈴木，1998）。これらの紙繊維の断面は不定形であり（例えば、馬淵，2003）、観察された円形の断面形とは明らかに異なる。また、絹繊維は、断面形状がやや扁平な円味を帯びた三角形を示し（有本，1980）、観察された円形の断面形とは異なる。

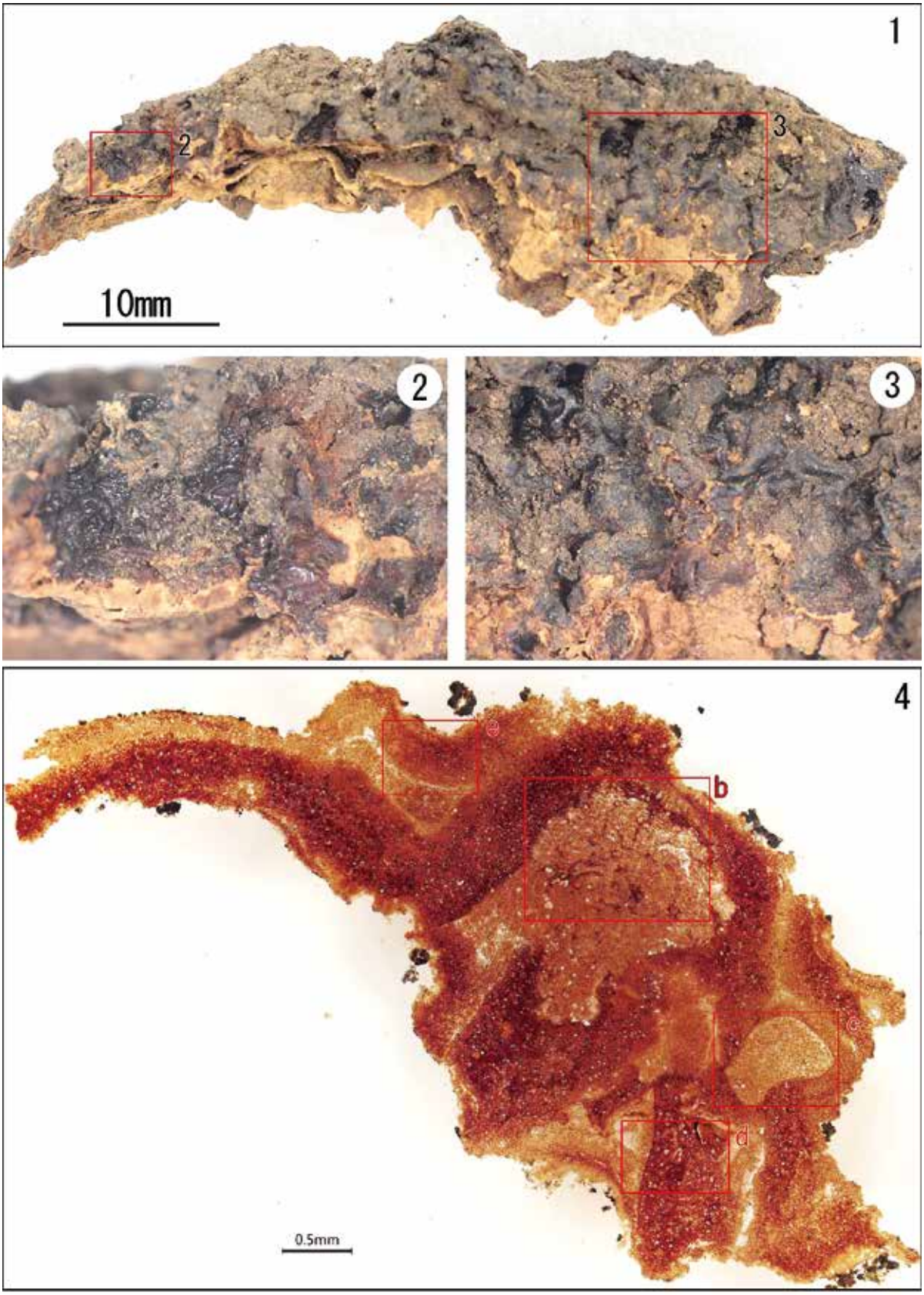
今回の試料で観察された円形の断面形の繊維は、表面形態は明確でないが、動物の体毛等の可能性が考えられる。さらに、平坦面と平行する断面薄片を作製し、表面形態の観察を行い、検討する必要がある。

引用文献

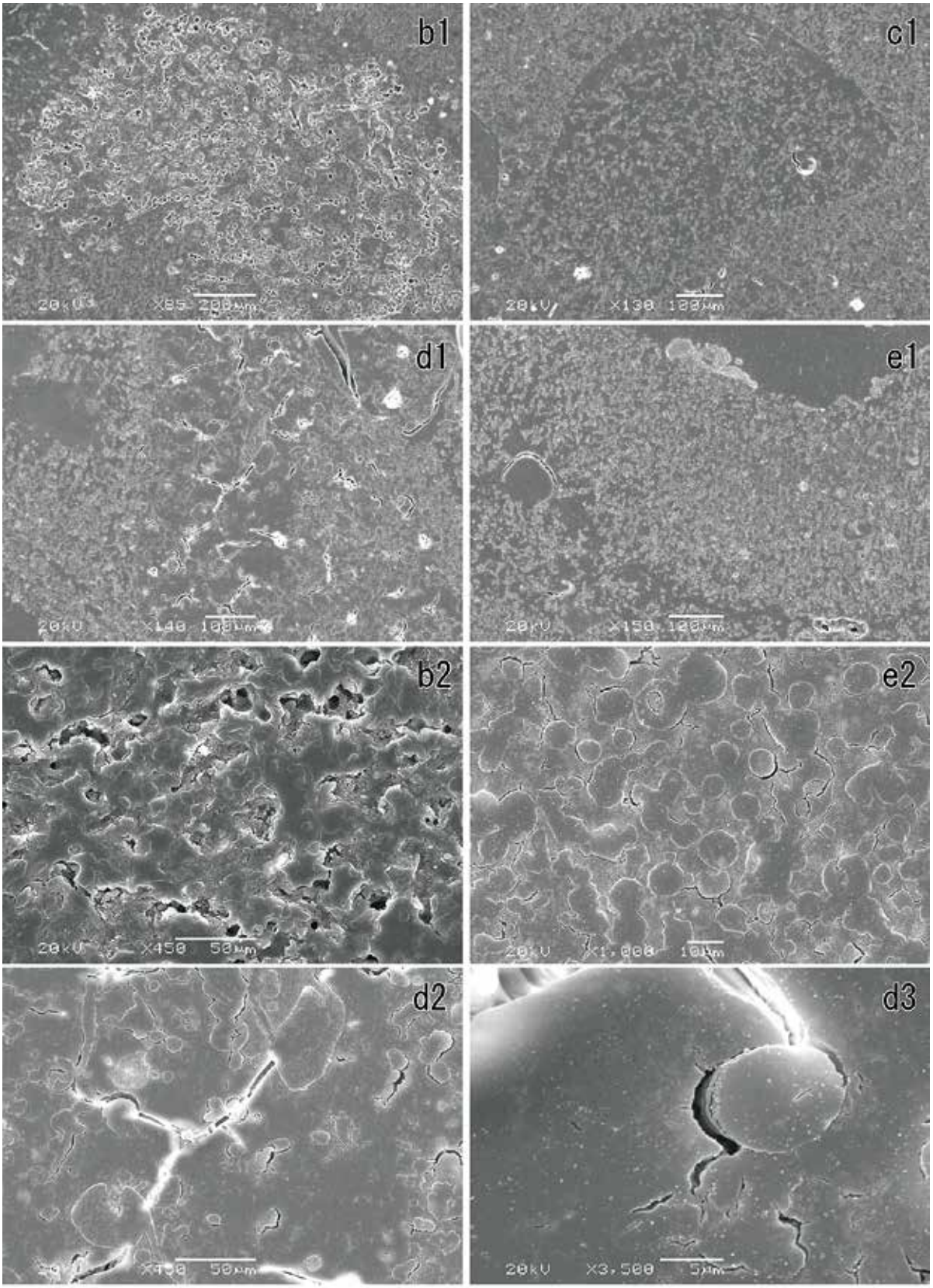
有本　肇（1980）絹の構造と性質．繊維工学，33，71-76.
馬淵久夫・杉下龍一郎・三輪嘉六・沢田正昭・三浦定俊（2003）文化財科学の事典．522p，朝倉書店.
鈴木棠三（1998）新装版　日本職人辞典．390p，東京堂出版.



図版1　Ｘ線透過撮影を行った漆塊とＸ線透過撮影像
1a. 漆塊の上面　1b.漆塊の底面
2a. 上面のＸ線透過撮影像　2b. 側面のＸ線透過撮影像



図版2　漆塊片（剥離片）と塗膜薄片
1. 漆塊片（剥離片）の破断面　2. 表面の縮皺（その1）　3. 表面の縮皺（その2）
4. 塗膜薄片（記号は電子顕微鏡観察の位置を示す）



図版3　塗膜薄片の電子顕微鏡写真塗膜薄片
b1. 黄橙色部（その1）　c1. 黄橙色部（その2）　d1. 波状赤褐色部（その1）　e1. 波状赤褐色部（その2）
b2. 黄橙色部の拡大　e2. 波状赤褐色部の拡大　d2. 波状赤褐色部の拡大　d3. d2の拡大

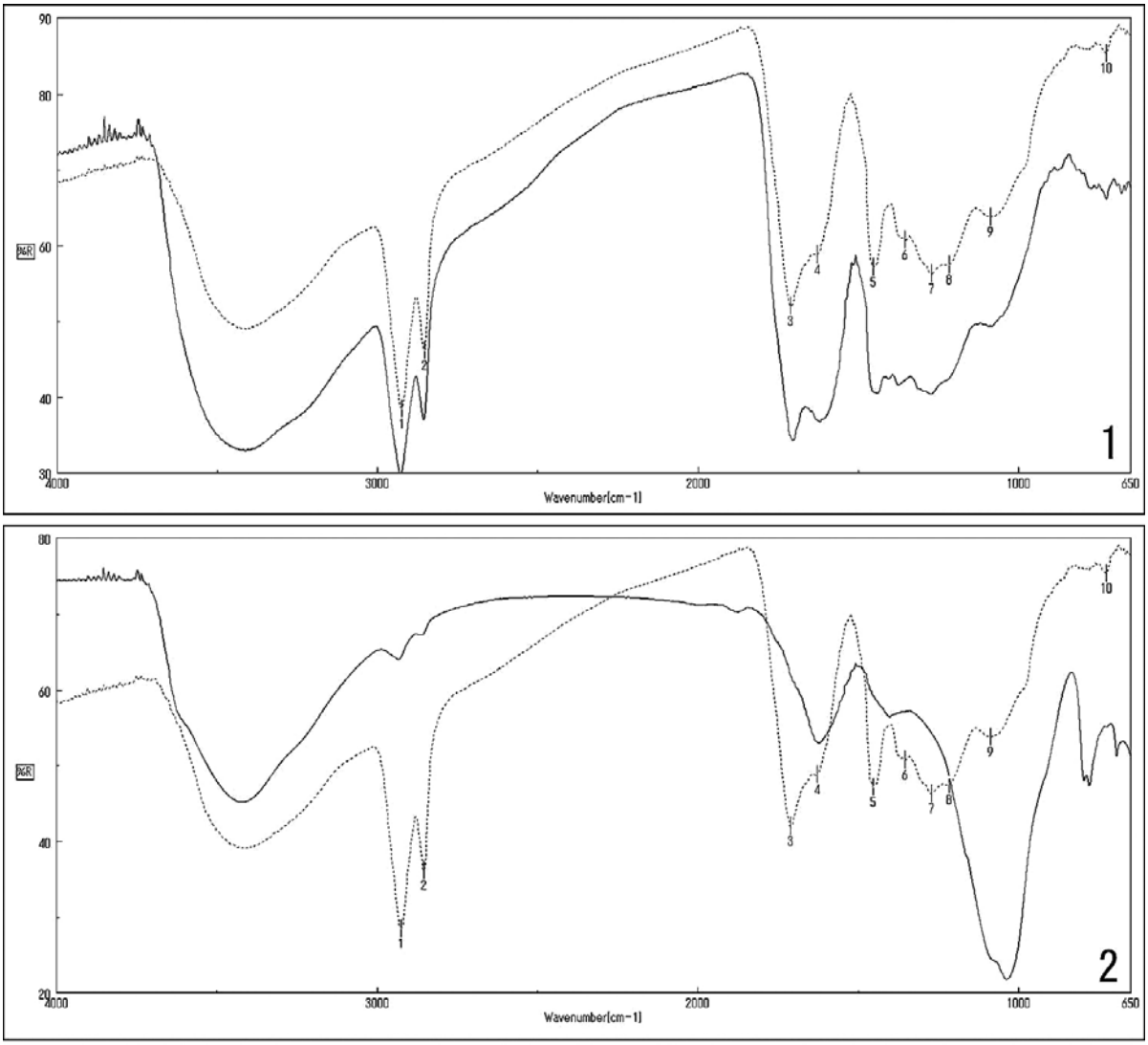


図1　赤外吸収スペクトル図（実線：試料、点線：生漆、数字：生漆の赤外吸収位置）
1. 縮皺を伴う黒褐色部の赤外吸収スペクトル図
2. 破断面内部の明黄褐色の赤外吸収スペクトル図

第５章　まとめ

１：出土遺物及び遺構の時期について

27号住居址は住居覆土の中層から上層にかけて遺物が集中的に出土した。これは住居廃絶後の埋没過程の中で、窪地となった27号住居址に遺物が廃棄されたものと思われる。中層から上層で出土した遺物の器種構成をみると、須恵器坏、蓋、高台付坏、椀、甕、短頸壺、長頸壺、土師器甕、台付甕、椀、漆塊など多岐にわたる。

ここで、27、28号住居址出土の須恵器を中心に遺物の時期を検討した。鳩山窯跡編年を基準とし、須恵器の編年観については古代入間を考える会2012、2014を参考とした。

ＨⅡ期

27号住居址１の蓋は推定口径24cmと大型で扁平な天井部、厚い器壁、しっかりとした環状つまみがつく重厚なつくりの蓋である。上記の特徴からⅡ期に該当すると考えられるが、一般的な椀蓋と比べ大きすぎる点や、１以外Ⅱ期に該当する遺物が出土していないこともありやや不明確といえる。

ＨⅢ期

27号住居址20は推定口径14.2cm、内底径9.2cmをはかりⅢ期前葉と考えられる。27号住居址15は口径13.9cm、内底径9.4cmをはかりⅢ期前葉から中葉に位置づけられる。

27号住居址10、11、13は口径13～13.3cm、内底径８～8.8cm、底部は全面手持ち篦削りが施される。口径は13cm大前半と小さいが内底径は大きく、また底部は全面手持ち篦削りであることからⅢ期中葉と考えられる。27号住居址22～27は底部器外面に「☆」の墨書が書かれる土器であるが、法量や色調、調整が酷似することから、同時に焼成された可能性がある土器の一群である。口径12.5～13.1cm、内底径7.9～8.1cmと法量は小さいが、差し込み痕を体部下端の篦削りや底部の丁寧な回転篦削りで入念に消していることから、「☆」が墨書された土器群はⅢ期中葉といえよう。また「☆」が朱書された27号住居址28も底部破片ではあるが22～27の土器の一群に含まれると考えられる。

27号住居址17～19は口径12.7～13.2cm、内底径7.8～8.3cmで、Ⅲ期中葉の土器と比べると法量は大きく変わらないが、直線的に立ち上がる体部や箱型を呈する器形からⅢ期後葉と考えられる。

27号住居址33、41～45は器面の一部あるいは全体が黒色を帯び、同時焼成されたと考えられる土器の一群である。推定口径11.7～13cm、内底径7.6～8.4cmと若干の開きはあるが、底部の篦削りは非常になめらかで、爪先技法、差し込みなど前内出窯産須恵器の特徴を持つ。口径をみると11cm大のものも含むが、内底径は８cmを超えるものが多く、Ⅲ期後葉～末葉と考えられる。

27号住居址３～６の椀蓋は推定口径18～18.5cmをはかりⅢ期と考えられる。

ＨⅣ期

27号住居址29、35、36、39、40は推定口径12～12.7cm、推定内底径7.6～９cmと小型化が進みⅣ期に該当する。36は推定内底径９cmと大きいが、差し込み痕が顕著で腰を大きく残す器形からⅣ期といえる。27号住居址56～60の椀は口径15.4～16.1cm、内底径９～9.6cmでⅣ期に該当すると考えられる。28号住居址４は推定口径12.4cm、内底径7.3cmをはかり、外反した口縁や丸みのある体部などⅣ期でも後半の様相を呈している。

ＨＶ期

28号住居址２は推定口径11.4cm、内底径6.2cm、丸みのある体部などＶ期に該当する。27号住居址からはＶ期と判断できる資料は出土していない。

27号住居址の下層から出土した１、20はⅡ期からⅢ期前葉の様相を示し、中層から上層にかけてⅢ期中葉からⅣ期にかけての土器が出土している。これらから27号住居址はⅢ期前半に構築し、Ⅲ期中に拡張、Ⅳ期までには廃絶し覆土に土器の廃棄が開始されたと考えられる。27号住居址の年代は８世紀第３四半期を中心とし、８世紀第４四半期には廃絶し埋没が始まると考えられる。28号住居址出土の須恵器はⅣ期後半からＶ期の様相を示し、土師器の甕も頸部がコの字状に近くなり、27号住居址出土の甕よりも新しい様相を示す。28号住居址はⅣ期後半、８世紀第４四半期頃に年代の中心を求められるであろう。

２：墨書土器について

今回の調査では、合計14点の墨書土器が出土した。全点が27号住居址からの出土であり、すべて須恵器に書かれている。記号のようなもの（第９図９蓋天井部器外面）、「同」と書かれた坏（第９図17体部器外面、第11図37底部器外面）を除いた11点は、すべて五芒星（以下「☆」）の墨書であった。

「☆」は、陰陽道、修験道で五行と呼ばれる木・火・土・金・水を象徴する記号とされ、中国大陸、朝鮮半島から伝わったものである。元は道教において用いられていたものが、呪術的な意味を持つようになったと考えられている。

出土した「☆」の墨書土器は、全点須恵器であることは触れたが、器種としては坏が10点、椀が１点である。書かれた部位は、坏は底部器外面が９点（内１点は朱書）と体部器外面が１点であり、椀は底部器外面になる。特に坏底部器外面に書かれた土器の内７点（第10図22～27、第11図28）は、胎土、法量、調整や焼成に類似性が認められ、同一の窯で焼かれた可能性が考えられる。更に「☆」も同一人の筆によるものか不明だが、底部中央に太い筆跡で書かれており、共通性の高い資料と思われる。

「☆」の書かれた土器の出土例として、群馬県上野国分僧寺・尼寺中間地域、千葉県柏市花前Ⅱ－１遺跡等がある。その内、集落内の住居址から出土している花前Ⅱ－１遺跡を見ると、合計16点の「☆」の土器が出土している。006住居跡は、土師器坏の体部器外面に墨書される。013・030・032住居跡は、まとまった数量が出土している。合計11点の内、５点は須恵器ですべて体部器内面の線刻、土師器６点は体部器内面の線刻２点と体部器外面の墨書４点である。015住居跡は須恵器２点とも体部に線刻される。１点は器内外面、もう１点は器外面である。報告では須恵器は線刻、土師器は墨書という差異（使い分け）がある可能性を指摘されている。出土状況は、他の遺物と同様で特に差異はないと思われる。

若宮遺跡27号住居址と花前Ⅱ－１遺跡013・030・032住居跡を比較すると、「☆」の数量はまとまっているが、出土状況はどちらも他の遺物と同様、埋没過程で窪地となった住居址に廃棄されたと考えたい。出土した「☆」の時期は、花前遺跡では９世紀中葉以降とされており、若宮遺跡とは開きが認められる。

若宮遺跡27号住居址では、須恵器大甕や極めて小型の台付甕、漆塊も出土している。「☆」の墨書と直接関係があるか定かではないが、出土層位が近いこともあり同時期の廃棄の可能性も考えられる。

今回、若宮遺跡27号住居址で出土した「☆」の墨書土器は、遺跡内において、道教の影響を受けた呪術的な祭祀が行われていた可能性を示すものと思われる。しかしながら、その祭祀の実態を明らかにするようなものではない。また、「☆」だけでなく、九字など呪術的な意味を持つとされる他の文字（記号）も含めての検討が必要なものと思われる。比較、検討を行える資料の増加を期待したい。

参考文献

中平　薫　　1983 「若宮　－第３次発掘調査概報－」 日高町埋蔵文化財調査報告第５集　日高町教育委員会

鈴木定明他　1985 「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　－花前Ⅱ－１・花前Ⅱ－２・矢船－」（財）千葉県文化財センター

渡辺一　武野谷俊夫　1989 「鳩山窯跡群Ⅰ」 鳩山町教育委員会

渡辺一　武野谷俊夫　1990 「鳩山窯跡群Ⅱ」 鳩山町教育委員会

木津博明他　1992 「上野国分僧寺・尼寺中間地域（８）　－関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第41集－」（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告第132集（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

中平　薫　　1993 「新宿　－５次調査－　若宮　－16・18次調査－」 日高市埋蔵文化財調査報告第21集　日高市教育委員会

柳戸信吾　　1997 「新井原遺跡・榎戸遺跡」 笠縫土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書１　飯能市遺跡調査会

村上達哉　　2007 「新井原遺跡第５次調査」 笠縫土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書３　飯能市遺跡調査会

中平　薫　　2003 「常木久保　稲荷　神明」 日高市埋蔵文化財調査報告書第31集　日高市教育委員会

高島英之　　2012 「出土文字資料と古代の東国」ものが語る歴史28　同成社

古代の入間を考える会　2012 「古代入間の土器と遺跡（Ⅰ）」

古代の入間を考える会　2014 「南比企窯と東金子窯（Ⅰ）」

松本尚也他　2017 「若宮　－45次調査－　古道　－14次調査－」 日高市埋蔵文化財調査報告書第37集　日高市教育委員会

中平　薫　　2019 「拾石」 日高市埋蔵文化財調査報告書第39集　日高市教育委員会

中平　薫　　2019 「王神」 日高市埋蔵文化財調査報告書第40集　日高市教育委員会

富元久美子・柳井維都花　2022 「飯能の遺跡（48）」 飯能市教育委員会

51次調査区全景（北東から）

51次調査区全景（西から）

図版2

27号住居址
遺物出土状況（1）

27号住居址
遺物出土状況（2）

27号住居址
遺物出土状況（3）

27号住居址遺物出土状況（4）

27号住居址遺物出土状況（5）

27号住居址遺物出土状況（6）

27号住居址遺物出土状況（7）

27号住居址遺物出土状況（8）

27号住居址遺物出土状況（9）

27号住居址遺物出土状況（10）

27号住居址遺物出土状況（11）

図版4

27号住居址（１）

27号住居址（２）

27号住居址カマド

28号住居址（1）

28号住居址西カマド

28号住居址（2）

28号住居址北カマド

28号住居址貼床下

28号住居址貼床下土錘出土状況

作業風景（1）

作業風景（2）

1

2

3

4

5

6

7

8

10

11

12

13

27号住居址出土遺物（1）

15

16

17

18

19

21

22

23

24

25

26

27

27号住居址出土遺物（２）

28

29

31

33

34

35

36

37

38

41

42

43

27号住居址出土遺物（３）

44

45

46

47

53

54

55

56

57

58

59

60

27号住居址出土遺物（４）

27号住居址出土遺物（５）

82

83

84

85

86

88

87

90

91

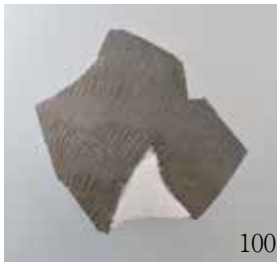
94

95

96

97

98


100

101

27号住居址出土遺物（６）

103

104

105

106

107

108

110

111

112

27号住居址出土遺物（７）

113

114

117

121

124

125

123

127

126

128

132

133

27号住居址出土遺物（８）

27号住居址出土遺物（９）

28号住居址出土遺物（１）

28号住居址出土遺物（２）

図版16

「☆」27住22

「☆」27住23

「☆」27住24

「☆」27住25

「☆」27住26

「☆」27住27

「☆」朱書27住28

「☆」27住29

「☆」27住45

「☆」27住57

「同」27住17

「同」27住37

墨書

報　告　書　抄　録

ふりがな	わかみや
書名	若宮－51次調査－
副書名	
巻次	
シリーズ名	日高市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第43集
編著者名	早川修司・大熊雅弘
編集機関	日高市教育委員会
所在地	〒350-1292　埼玉県日高市大字南平沢1020　TEL042-989-2111
発行年月日	2023年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村番号	コード 遺跡番号	北緯 (°′″)	東経 (°′″)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
わかみや 若宮遺跡	さいたまけんひだかし 埼玉県日高市 おおあざおなかげ 大字女影 あざはちろうぜき 字八郎関	242	132	35度 89分 75秒	139度 36分 78秒	2019,5,7～ 2019,6,14	366.12㎡	個人住宅

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
わかみや 若宮遺跡 (51次調査)	集落跡 寺院跡	奈良・平安時代	住居址２軒	須恵器　坏、甕 土師器　坏、甕 鉄製品　紡錘車、刀子	27号住居址から五芒星の墨書土器が11点出土した。同住居址は須恵器大甕も出土した。

日高市埋蔵文化財調査報告書　第43集

若　宮
－51次調査－

発行日	令和５年３月31日
編集兼 発行者	日 高 市 教 育 委 員 会
印刷所	株 式 会 社 ブ ラ ウ ズ
発行所	日 高 市 教 育 委 員 会 埼玉県日高市大字南平沢1020